



TITLE:

殷中期に由來する鬼神

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

---

CITATION:

林, 巳奈夫. 殷中期に由來する鬼神. 東方學報 1970, 41: 1-70

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66464>

RIGHT:

# 殷中期に由來する鬼神

林 巳 奈 夫

一、羽根の由來	二頁	八、井紋	三五頁
二、龍身鳥首神紋	五頁	九、目申紋	三八頁
三、所謂饗養と龍身鳥首神紋	一二頁	一〇、目于紋	四二頁
四、凹字形龍紋、所謂饗養紋と凹字形龍紋	一八頁	一一、飛紋	四四頁
五、S字形反鼻龍紋	二四頁	一二、所謂饗養紋	四五頁
六、S字形垂鼻龍紋	二五頁	一三、複合羽紋	五二頁
七、岡兩紋	二九頁	一四、結び	五三頁

古い物事を調べてみようといふ場合、資料を注意深く觀察して分類し、年代順に並べてみるのが最も基本的な作業の一つである。中國の古代、殷周時代の青銅器その他の器物を飾る多様な紋様を調べる場合も例外でない。從來何人かの研究者が行つたこの分野の研究が多く不毛なものに終つてゐるのは、粗雑な觀察によつてあまりにも雑多なものを同一視し、乃至は同一物の變異なり簡略化とみなして同一分類の中に引きくるめ、或ひは長い年代にわたる産物を非歴史的な態度で分類、命名するに留つたことによる。<sup>(1)</sup>

殷周時代といふと、豊富ではないにせよ文字で書かれた資料が残つてゐるから、遺物だけでなく、この方の資料も極力活用することが望ましいことはいふまでもない。鬼神の圖像——所謂動物紋様<sup>(2)</sup>——を研究する場合、それが文獻資料に出て来る名前でも何に當るものかを知ること成功したら、研究は格段とみのり多いものとなることは改めて説明を要しまい。反對に、例へば同時代に明かに「龍」と呼ばれたものに對し、これとは別の恣意的な名稱を冠して呼んでみたり、また「鳳」などと呼ばれたことのなかつたものを「鳳」と呼んだりしたのは切角の文獻資料と、同時代の實物の資料とが、互に啓發し合ふことな

く終るだけならまだしも、非専門家の頭に飛んでもない誤解を生みかねない危険があるのである。

さうはいつても、殷周時代の資料に關して、右に記したやうな基本的な作業すべてがうまくゆくことはむしろ稀なことに屬する。大部分の場合、圖像資料も、文獻資料も、どちらもこの作業には到底向かないほどに不十分な形でしか殘存してゐないからである。筆者がこれまで何度かの機會に取りあげて論じたのは、この稀有の偶然によつて右の條件が何とか整ふ例であつた。<sup>(3)</sup> かういふ好條件を具へた研究對象も未だいくつかあるが、ここで筆者が選んだものは、やや別の標準によつたものである。

殷中期の青銅器、土器には殷後期のものほど複雑多岐でない、比較的單調な形式をもつた紋様がつけられてゐる。現在のところ遡りうる、殷周青銅器紋様の最も古い形である。ここにはこれらの紋様のうち、所謂幾何學紋や、龜、虎、人間形など、自然にある生物を象つた類を除き、この時期の紋様の主流をなす、羽根が重要な構成要素をなした類をとりあげ、これから出發して時代を追つて形の變遷をたどり、どれ位の種類のものが生れて來てゐるかを調べてみる。最も古い、比較的單純な形式に遡つてみると、諸々の鬼神の圖像はその成り立ちを最も單純明確な形で呈示してゐることに氣付く。この段階まで遡つてみるによつて、殷後期以後の中國の鬼神の性格、その成立の歴史に關して新しい展望が得られるであらう。またかうしてたどられた諸々の鬼神の分化や進化の過程は、現在知られる中國最古の文字資料、殷虛卜辭が出現する殷後期に先立つ時期における、殷の統一過程の歴史について、族神の歴史といふ形で若干の手がかりを與へてくれるのである。それは兎も角、本論に入らう。

## 一、羽根の由來

以下の記述でしばしば「羽根」の語が使はれるが、その何たるかについてはつきり認識してゐないことには、話も一向に理解できないことになる。始めに注解を加へておく。ここに羽根といふのは、圖一、1、2（挿圖の出典は末尾挿圖目錄を參照。目錄に

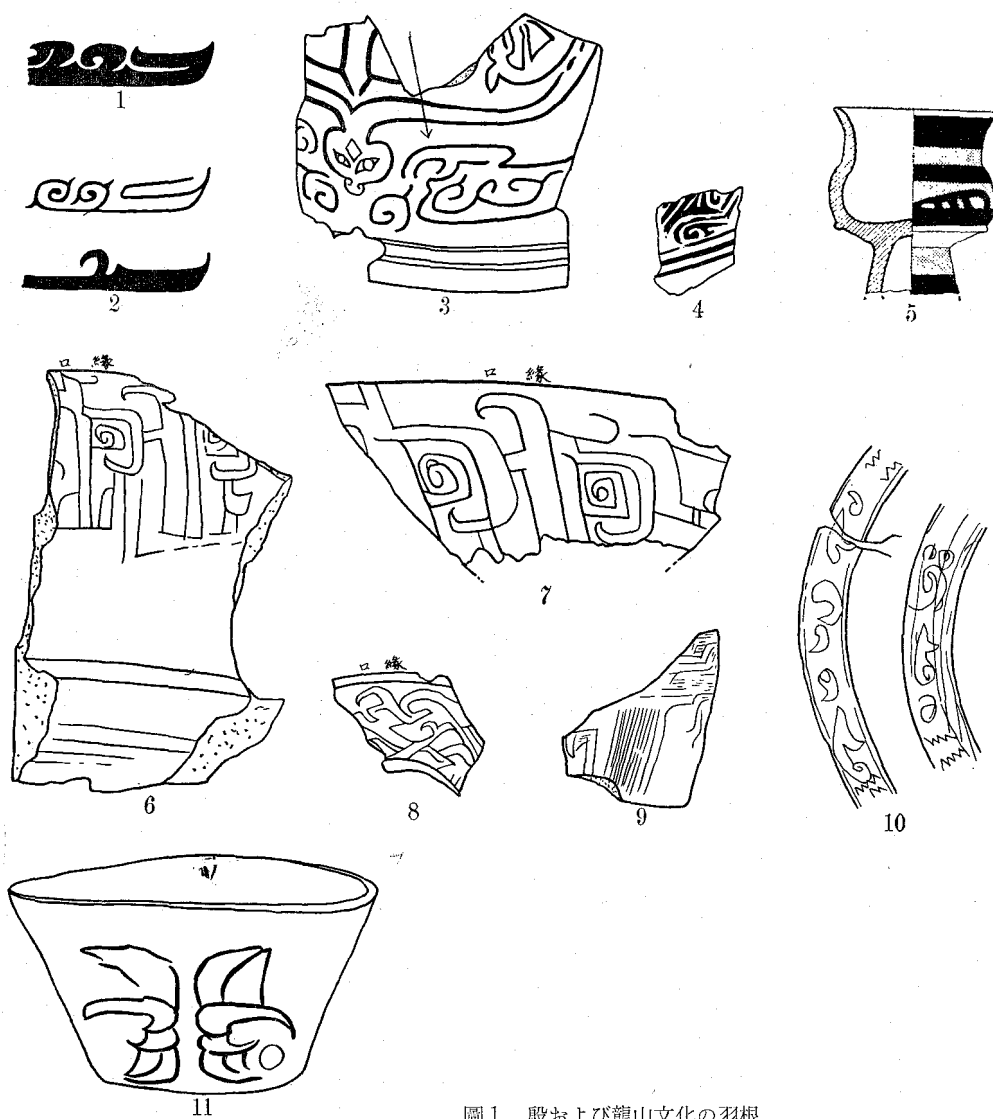


圖1 殷および龍山文化の羽根

特に注記してあるもの以外は縮尺約  $\frac{1}{2}$  のいとき形を基本とする要素である。この形が鳥の羽根を象つたもので、羽、非（飛）などの文字の構成要素もこの形を單純化して表はしたものであることは、以前に筆者がくはしく解説した通りである。<sup>(5)</sup> 殷西周時代の青銅器の紋様を檢分してみれば直ちに知られるごとく、この要素は鬼神の身體各部の構成要素として、また身體各部に附けられる附加的なものとして、或ひは身體の外側の空間を埋める線紋として等、鬼神の表現と不可分な關係にある。<sup>(6)</sup> たへてみればあたかも植物と縁との關係のごとくである。

殷中期以後の青銅器その他の遺物を飾る鬼神の圖像にかく不可分に結びついたこの羽根の紋様が、古く龍山文化に由來することは從來注意されてゐない。圖一、3は殷早期と考へられてゐる、偃師二里頭遺蹟出土の土器で、上部に双身一頭蛇が表はされてゐる。その胴の下には渦紋の類が刻されてゐて、双身蛇の目や鼻の表はし方と共に、明かにもつと後の時代のものに通ずる表現の特徴が認められる。この土器片の紋様のうち、矢印で示した部分は、今問題の羽根の古い形と認められよう。多少とも長い刀狀の部分と、小枝、鉤、乃至渦紋を以て構成されるこの羽根につながる紋様は龍山文化の土器に見出される。圖一、4は登封王村遺蹟下層出土の黑陶に刻まれた例である。黑陶、白陶甗などと同出である。圖一、5に引いた曲阜尼龍山文化遺蹟出土の彩繪陶にも同系の紋様がみられる。灰陶に赤を帶狀に塗り、その間を黃色で埋め、そこに赤でこの紋様を表はしてゐるのである。<sup>(8)</sup>これらと同系と思はれる。F字形を組み合せ、或ひはこれに渦紋を加へた紋様は、日照兩城鎮發見の薄手の黑陶に、極く細い線で刻まれてゐる(圖一、6-9)。圖一、10は杭州良渚鎮出土の黑陶盤の縁から採つたものである。ここに畫かれてゐる枝の出たコマ狀の紋様、その略形と思はれるコマ形も、右と同系統のものであることは疑ひない。<sup>(10)</sup>このやうな一種のコマ形の羽根を用ゐた紋様は、湖北の天門石家河遺蹟からも出てゐる(圖一、11)。この土器と一緒に出土した遺物の中には、圓孔で飾つた高杯とか、圈足附の壺など、黑陶文化系であることが明かな遺物がある。<sup>(11)</sup>地域はとび離れてゐるが、この土器が同系統の紋様をもつ所以も理解されよう。さてこの紋様は、羽根を何枚か重ね合せ、大體左右對稱な形にまとめ上げてゐる。報告者はこれを饕餮紋と呼んでゐるが、さう見るためには目が缺如してゐる。むしろ後述の于紋の類につながるものと見る方がよさうである。

現在のところ龍山文化期の關係資料として示しうるのはこの程度しかない。故に龍山期から殷まで、確實な例證を年代順にたどつてその變遷を説明することはできない。然しここに示した斷片的な資料を以てしても、次のことは明かに出來たと考へる。即ち、殷時代の鬼神の圖像の構成要素として大量、普遍的に用ゐられる羽根が、殷になつて突如として出現したのでなく、龍山期には早くも證跡が求められ、中國本土で長い歴史を経たものである、といふことである。さうすると、これからこの論

文で考察を加へようといふ殷中期のこの羽根を主要な構成要素とする青銅器の紋様も、現在知られる遺物の紋様としては最古であるが、それ以前にやはり長い歴史を中國本土で経た後に、今見る形に到達したものであると想定せねばならないのである。

## 二、龍身鳥首神紋

圖二、1は安陽小屯三八八號墓出土の觚の足の紋様である、レールのⅡ式に當り、典型的な殷中期の様式をもつ。嘴を左に向けた鳥の頸から上の側視形が並列されてゐる。橢圓形の目の左に鉤形をした嘴が先づ認められよう。嘴の下、喉の所から羽根が左に向ひ、次いで上にはね上つてゐる。目の右をみると、目を中心にして嘴と對稱な形に曲線が右下にのび、その先は上にはね上る。その先端から羽根が一ひら出てゐる。

圖二、2は泉屋博古館所藏の尊の肩の紋様であるが、1と同様な紋様である。この方は嘴を右向きに表はしてゐる。後頭部から羽根が出て頭の後の空間を埋め、それと前方、喉から出た羽根が目を中心として對稱に近い形に表現されてゐる所に1と相違があるので引いた。<sup>(13)</sup>目の下、頸についた紋様を見落すと、後述の目申紋の原形となつたものと非常にまぎららしい。

圖二、3は輝縣琉璃閣一四八號墓出土の觚の足の紋様である。2と全く同じものを表はしてゐるが表現は一段と線紋化してゐる。目に白目の部分を加へてゐる所に2と相違がある。圖二、4は安陽小屯三三一號墓出土の觚の足の紋様で、右半の部分に同じものが見られよう。表現は全く線紋に化してゐる。<sup>(14)</sup>これらの銅器はレールのⅢ式に當る。絶對年代は殷中期から後期にかけての頃、前一三〇〇年前後である。

圖二、5は天理參考館藏の甗の肩の紋様である。圖には略してあるが、幅廣い帶狀の面で表はされた紋様の周囲の空間は雷紋で埋められてをり、レールのⅣ式に當る。表現の様式が著るしく異なつてゐるため、ちよつと見ただけでは氣附かないが、よく見るとこれは圖二、3や4の右半と同じ對象を表はしたものである。即ち、目の左に鉤狀の嘴があり、目の下、喉の

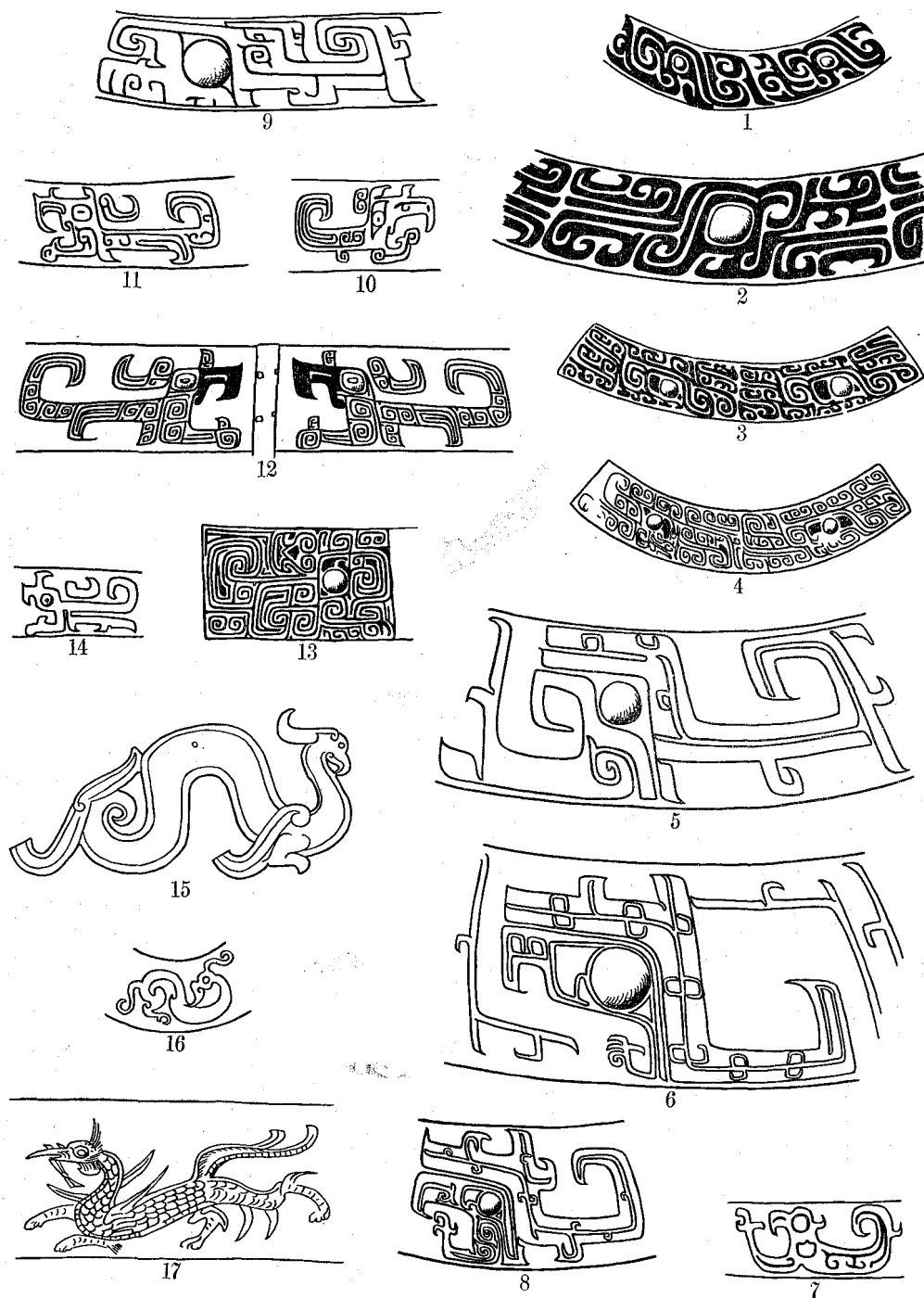


圖2 龍身鳥首神



18



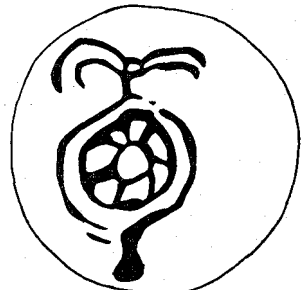
19



20



21



22

圖2 (つゞき) 龍身鳥首神および關係資料

邊から左に出、次いで上にはね上る羽根がある點、また頭の右後から右に延び、次いで上に卷いた部分がある點、圖二、3及び4の右半とよく照應する。また圖二、3及び4の右半をみると、頭の後についた羽根は頭の上から嘴の上にまで展開してゐるが、圖二、5でも頭の上から後にかけて、これと對應する羽根が線紋でなく、幅廣い帶を以てであるが頭の上に密着して表はされ、頭の後から出た尾のやうな部分の末端に至るまで、その上面にずつと平行して表はされてゐるのである。つまり圖二、5は3及び4の右半と同じ對象を、その期に獨特な様式を以て畫きかへたものであることが知られたと考へる。<sup>(15)</sup> 圖二、6は泉屋博古館藏の甌の肩の紋様で、5と同時期のものである。5で喉から前にのびてゐた羽根は喉から遊離し、その根本は手に化してゐる。<sup>(16)</sup> 圖二、7は6とはほぼ同時代の寧樂美術館藏の尊の足の紋様であるが、長い足が嘴の前までのびてゐる。5で喉から突出してゐた羽根全體が足に化した形である。圖二、8は臺北の故宮博物院藏の甌の肩の紋様で同じ時期のものである。この例では喉から遊離した前部の羽根は消失し、足だけが残つてゐる。<sup>(17)</sup>

圖二、10、11は紋様が浮彫で表はされてをり、レールのV式に當る。レールのV式は色色の表現形式のものを含むから、かなり長い期間のものを包括してゐると思はれる。然し現在のところ殷後期の青銅器の精密な編年は確立されてゐないので、便宜上大雑把な一時期として取扱ふ。このレールのV式に入る青銅器がすべて圖二、5—8のごときIV式より時期がおくれるか



どうかについては問題がある。例へば安陽侯家莊一〇〇四號墓出土の牛鼎、鹿鼎<sup>18</sup>は紋様をレリーフで表はし、レールのV式に入る。この墓は相疊關係より一〇〇一號墓よりおそいものとされる。<sup>19</sup>そして一〇〇一號墓出土の青銅器の大部分はIV式に屬し、またこの墓は青銅器のIV式と對應する表現とレールが指摘する技法の彫骨を大量に出してゐて、<sup>20</sup>この式の青銅器が大體この墓の主の生存した時代に普通に行はれたものであると推測せしめる。この點においてレールのV式がIV式におくれるといふ大勢は學術發掘の遺物に大凡合致してゐるといへる。然しこの侯家莊一〇〇一號大墓からは、またV式に屬する表現の饗餼<sup>21</sup>をつけた青銅罇が多數出てゐるのである。個個の遺物について、それがV式に屬するからといつてIV式の遺物より必ず時代が降るものだとはいへば斷定し難いことを示すものである。

さてさきの圖二、10、11は今日日本で夔鳳と呼ばれてゐる紋様であるが、夔鳳といふ呼稱の起原はくはしく調べてみたことがない。<sup>22</sup>圖二、10は白鶴美術館藏の方彝の口縁の下の紋様、11は『鄭中片羽』第三集所載の鼎の頸の紋様である。これらの紋様が圖二、8から出て來たものであることは、圖二、9を間に入れて8、9、10とその變遷をたどつてみれば直ちに理解されるはずである。圖二、9は安陽侯家莊一〇〇一號大墓出土の甗の肩の紋様である。5、6、8のごとく、目ばかり大きく、頭上に大きな羽根がおほひかぶつたものから、多少とも動物らしいプロポーションをもつたものへの展開が看取される。頭の後から水平に後方に向つてのび、端が上に巻き上つた部分は、10、11では同時期の龍の類の胴と尾と同じ表現となり、頭は鳳凰の類と同様に表はされ、コンマ狀、C字狀などの冠羽、角乃至耳が附くやうになる。足が喉の所から前に出る點は變つてゐない。このやうな動物は圖二、12に引くやうに、向ひ合つた形で表はされることが多くなる。

圖二、13は器の形式や紋様の表現からみて西周前期のものと思はれる方彝から採つたものである。渦紋の中に埋もれて同様な動物が存續してゐることが認められよう。圖二、14は方彝の頸につけられた例である。器腹の饗餼紋の表現様式から西周中期に降ると思はれる。時代を追つてその圖像の發展をたどり得るのはこの邊までである。

これでこの系統の圖像の傳統が絶えたかと思ふとさうではない。圖二、15、16はいづれも戰國時代の例であるが、鳳凰の頭

に龍のごとく屈曲した胴が付き、一本の足のみを表はしてゐる點、西周迄のものと原則が一致してゐる。この際、西周中期から戰國までの資料の空白が氣になるが、これは耐久力のある材質にその圖像を飾る傳統が失はれただけで、圖像は別の媒體の上で存続したと考ふべきである。次に示す龍と鳳の組合さつた圖像もさうだし、他にも殷から漢までの圖像の傳統の連續してゐる例は龍、鳳凰その他、いくらでもあるからである。

圖二、17、18は沂南畫像石墓の例で、後漢末頃のものである。龍身に鳳凰の頭がついた動物であることはいふまでもない。

#### 『山海經』南山經に

凡南次二經之首、自柜山至于漆吳之山凡十七山七千二百里、其神狀皆龍身而鳥首

とある。龍身にして鳥首の神とは、圖二、17、18のごときものに違ひない。この節の題はここから採つたのである。この節に扱つた圖像は同一系統の發展がたどられるのであるから、同じこの名稱を以て呼べば當らずといへども遠からず、といふ所である。今後この名を以て呼ぶことにする。

龍身鳥首神は『山海經』で特定の地域の山に住む神とされてゐるが、その殷時代における祖先も、特定の地域、そこに住む氏族に屬する神格であつたと考ふべき證據がある。圖二、19に引いたのは青銅器につけられた圖象記號であるが、圖二、12に示したごとき、向き合つた一對を記號化したものである。圖象記號の乙字狀にくねつた胴は、足から上が長く、また尾の先が上に曲らず、體に羽根の小枝が出てゐない點圖二、12と相違があるが、この類のうちでも圖四、3、5のごとき、饕餮の後に表はされたものの中には、この圖象記號のごとき特徴をもつたものも認められるから、やはり圖二、12のごとき圖像を記號化したのが19であるともて間違ひなからう。この圖象記號は先に筆者が物(鬼神)を表はしたものとした部類に入る。この圖像が、氏族の占居する地域に住むと信ぜられ、その氏族がその祭祀を行い、その旗印としてその圖像を用ゐ、その名を以て氏族の名とした所の鬼神と考へられることも先に記した所である。

圖二、20に示したのは漢代の瓦當の紋様である。一見して19との類似が目されよう。ただ、この場合向き合つてゐるのは

龍身鳥首神でなく、鳥である。19のごとく足を前に投げ出した形で向ひ合ふ形になり、間に罫紋が入れられてゐる。象徴的な意味を荷つたと考へられる罫紋と組み合わせはされてゐる點や、また吉祥の意味をもつた圖柄や文字が表はされる風習になつてゐる瓦當の紋様に用ゐられてゐる點などからみて、この一對の向き合つた鳥も何等かの象徴的な意味をもつた傳統あるものと見て差支へなからう。或ひは殷時代の一對の龍身鳥首神の遙かな後裔の一つではなからうか。

圖二、10—12のごとき龍身鳥首神の圖像も、殷中期に遡ると、頭の後には嘴と同大の渦紋があるだけで、到底「龍身」といふことは出來ず、むしろ鳥のトルソーといった方が適切な姿を以て表はされてゐるのである。さうかといつて全く別な名稱を冠するのも混亂のもとであるから、假に原Ⅱ龍身鳥首神と呼ぶことにする。

原Ⅱ龍身鳥首神の更に古い形はどういふものであらうか。兩者をつなぎ合せる資料は今の所殆んど皆無であるとはいへ、古く仰韶文化の彩紋中に鳥のトルソーが見出されることは興味深い。石興邦は馬家窰期の土器の波狀渦紋が、圖二、21のごとき鳥頭紋から變化して生れたものであることを圖示してゐる。大いにありうることと考へられるが、この馬家窰期の彩紋の最も特徴的な紋様のもととなつた鳥頭が、圖二、1、2とよく似てゐる。即ち、第一に頸から上だけであること。またこれを横の紋様帯に並べて使ふことも共通する。更に嘴と、頭の後に冠羽が、波狀のリズムを以てうねつてゐることも兩者に共通する。筆者は先に鳳凰の一類として翟Ⅱ鳳凰を分類し、その原形として金雞を想定した<sup>(30)</sup>。この馬家窰期の鳥の紋様も同じ類と考へられる。

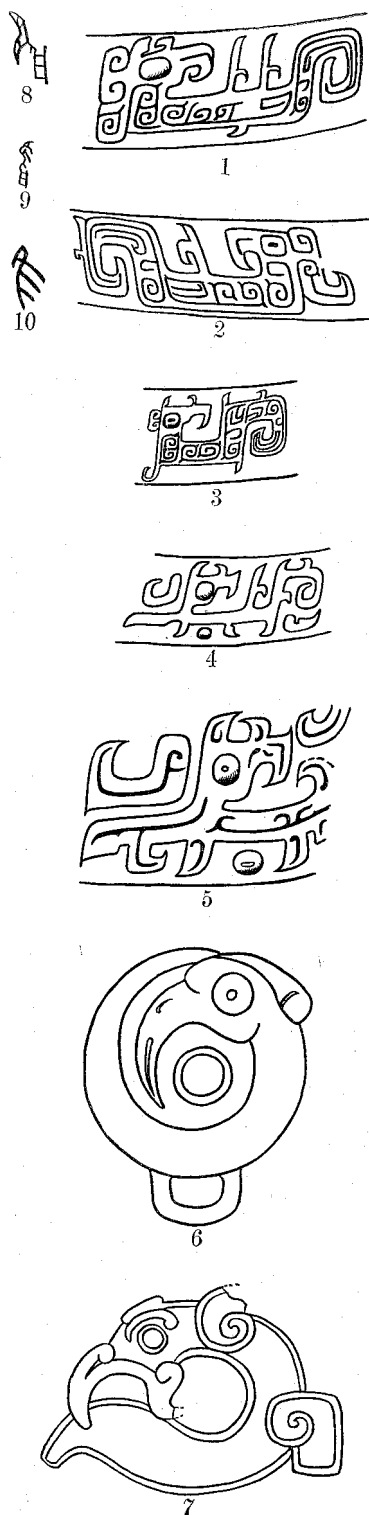
馬家窰期の彩陶の紋様と殷中期の原Ⅱ龍身鳥首神が意外なほどよく似ることがわかつたが、兩者の間にどのやうな歴史的關係があるものか、橋渡しをしてくれる適切な資料が今のところ殆んど見出し難い。圖二、22に引いた上海市青浦縣崧澤遺蹟中層出土の例は辛うじてその役割を果すか果さないかである。この紋様は龍山系文化の壺の底に浮彫りされてゐる。甘肅仰韶文化の土器の彩紋と殷時代の器物の紋様の偶然とはいひ難い類似の例としては、例へば「爪附きジグザグ」のやうなものもあり、ここにあげたのも孤立したものではないことは注意しておく必要があらう。

右に述べて来たのは、原龍身鳥首神(圖三、3、4)から轉化し、頭の後にのびた曲線が龍身に變化し、喉から前にのびた羽根が爪のある足に化した類である。同様龍身鳥首神に變化したもので、これとは反對に、嘴と同方向に出た羽根が龍身に變化したとみるべきものがある。圖三、1はレールのIV式に屬する鼎の頸の紋様である。胴と尾は頸から前に向ひ、頭の後にはT字形の角があつてその下に上向に卷いた渦紋が痕跡的に残つてゐる。圖三、2は泉屋博古館藏の簋の頸の紋様で、これも同じ時期のものであるが、この例では頭の後の渦紋は消失し、コンマ状の角だけがつけられてゐる。圖三、3は角が小さく、耳とも見える例である。

圖三、4は表現の様式から西周前期と思はれる例である。圖三、5は凌源出土の青銅彝器殘片につけられたもので、時代は勿論西周前期頃である。不完全だが、この形式の圖像が大きく扱はれてゐる點が珍しい。頭の後に羽根が割合大げさに表はされてゐる點、原形のおもかげが強く残つてゐる。

この類でこれより時代の降る例は今のところ知られない。圖三、6は西周中・後期の青銅鑊のデザインに使はれたもので、鳥頭に龍身乃至蛇身が着き、嘴を胴の方に向けてゐる點に共通點があるため拾つてみた。胴が圓く卷いてゐる點に大きな相違

圖三 龍首龍身鳥首神および關係資料



があり、5までのものと同類といへるかどうかが問題がある。圖二、7は侯馬出土の春秋末乃至戰國初の陶模で、大きく嘴を開いた鳥頭に圓く卷いた胴がつき、6の後裔と見てよささうである。

圖三、6、7は除外するとしても、同圖1—5は要するに、胴が嘴と同方向の羽根から發達して、あたかも頭を自分の胴と尾の方にふり向けた形になつたものである。顧首龍身鳥首神と呼ぶことができよう。多少餘談になるが、ここに「顧首」といつたのは、顧字の本來の意味においていつてゐるのである。といふのは、甲骨文で雇といふ字があるが、この字は圖三、8、9のやうな形に作られ、「戸」と「佳」に従ふが、この佳は通常の佳でない。つまり、この甲骨文雇字に使はれる時以外は佳は必ず圖三、10のやうな形に表はされ、嘴を體の前方に向けてゐる。<sup>(32)</sup>ところがこの雇字の从ふ佳のみは頭を背中の方にふり向けてゐるのである。<sup>(33)</sup>この文字は甲骨文で鳳の象形字に「凡」の音符を附けてゐるのと同じことで、顧首の鳥の象形字に「戸」の音符を加へたものと考へられる。つまり、首を後にふり向けた鳥が雇(顧)の本字と考へられるのである。圖三、1—5を「顧首龍身鳥首神」といつたのはその本義において使つてゐるのである。

### 三、所謂饕餮と龍身鳥首神紋

圖四、1は嘉山泊崗出土の甗の紋様で、いふまでもなく殷中期のもの。羽根を組み合せた込み入つた線でもつて所謂饕餮が大きく表はされてゐるが、よくみるとその後下に前節で記した原Ⅱ龍身鳥首神が發見される——圖で左上の矢印をした所から下邊の矢印まで、白い部分をたどつてゆくと、饕餮とは完全に分離した一つの原Ⅱ龍身鳥首神が姿を現すはずである。嘴を饕餮の後方に向けた形である。この原Ⅱ龍身鳥首神の頭上には、頭の後に垂れてゐると略々同じ形のもものが立つてゐるが、これは圖二、3、4の右半で頭の上にかぶさつてゐた羽根に對應するものである。<sup>(34)</sup>

圖四、2も1とほぼ同時期、レールのⅢ式に屬する甗の腹部の紋様である。左邊の矢印から右に、ついで下邊の矢印に向ひ、

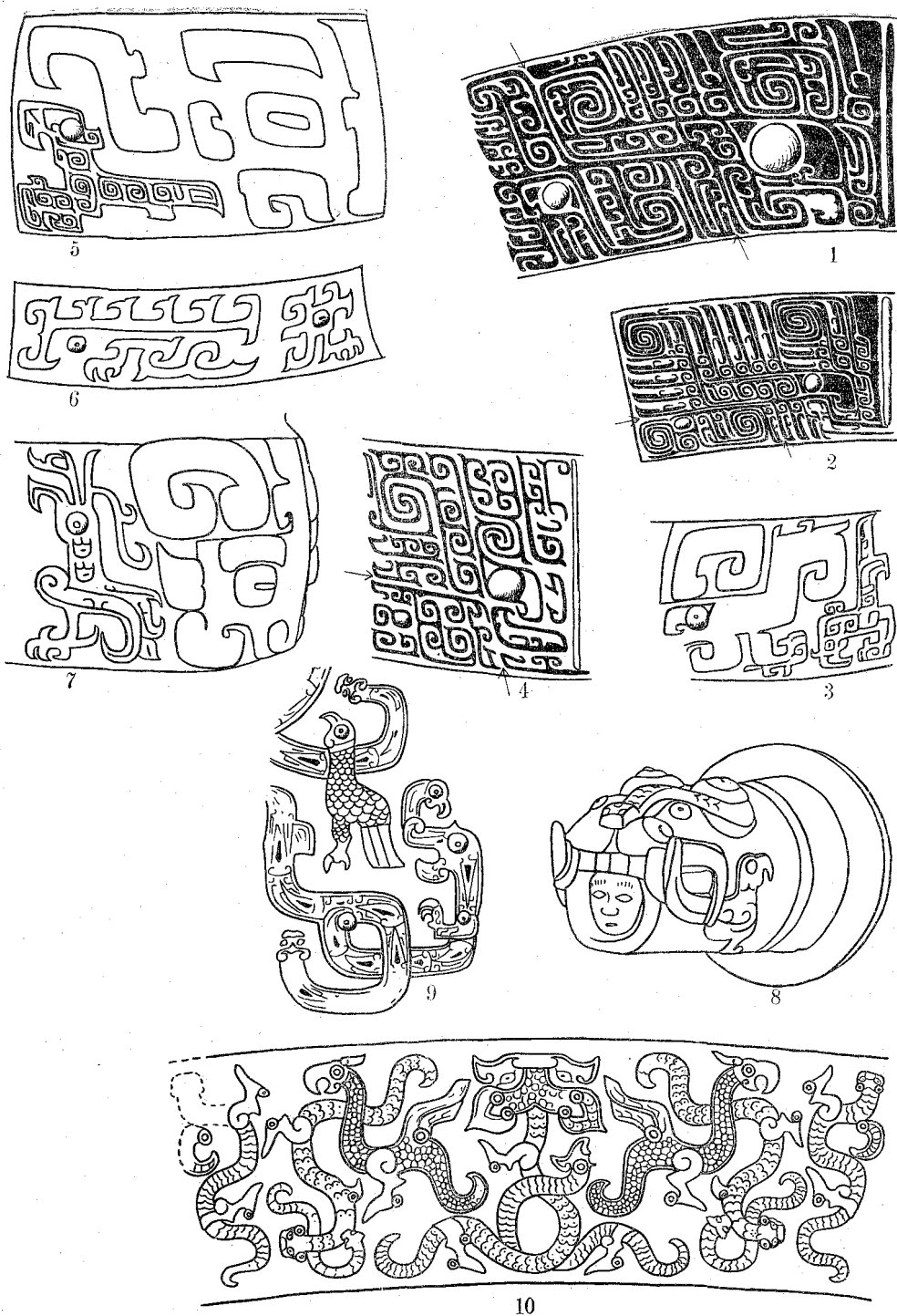


圖4 所謂饕餮と龍身鳥首神，所謂饕餮と鳳凰

白い部分をたどると、ここにも饕餮の後下に低く原龍身鳥首神が表はされてゐることが知られよう。この例ではその頭上に丈の高い羽根がない。圖四、4もほぼ右と同時期の例で、スウェーデン國王藏の罍の腹の紋様である。圖に記入した矢印をたよりに、同じく饕餮の後下に表はされた原龍身鳥首神を見出すことができる。この例では、圖二、3、4の右にみるのと同様な形で頭上にかぶさつた羽根が表はされてゐる。

この系統の紋様は殷後期になると圖四、3、5のごときものになつてゐる。3はミネアポリス美術館藏の罍の腹の紋様でレールのIV式、5はホルル美術館藏の罍の腹の紋様でレールのV式であるが、その絶対年代の先後はさきに記したごとく、IVの順であるかどうか明かでない。饕餮の後には別に説明を要しないごとくはつきり分離した形で龍身鳥首神が表はされてゐる。この式の表現は例が多くは見出されない。

更に年代の降るものでは、圖四、6のごときものがある。泉屋博古館藏の西周前期末—中期初の卣の足の紋様で、これより新しいものは現在のところ知られない。身體各部がばらばらの要素に分解し始めた龍の後に、明かに原龍身鳥首神の面影を残した圖像が表はされてゐる。この例では、1—5で所謂饕餮が占めてゐた位置を横長の龍が占めてゐる。所謂饕餮とは龍の屬のうち頭を大きく表はしたものに對する通稱で、1—5の饕餮と6の龍と特に性格の上で區別があるわけではない。

圖四、7に引いたのはフリア美術館藏の尊の腹の紋様で、所謂饕餮の後に龍身鳥首神の代りに鳳凰を配した類である。ここには翟鳳凰の例を引いたが、<sup>(35)</sup>寶雞鳳凰、<sup>(36)</sup>孔雀鳳凰を配する例もある。<sup>(37)</sup>殷後期まで遡るものもあるかもしれないが、西周前期のものが大部分である。これらの鳳凰がみな饕餮の後方に向つて立つてゐる點、圖四、1、2、4、5など、饕餮と組み合わせはされた龍身鳥首神がとる方向と同様である。その神格としての性質が近似する所から、殷中期以來の龍身鳥首神が、殷後期末乃至西周初の頃、鳳凰によつて置きかへられたものと考えられる。

圖四、8は饕餮が鬼を食ふテーマを害の金具に表はしたもので、上海博物館の所藏品である。相似たテーマを表はした事は陝縣上村嶺發掘の春秋前期の例が知られてゐる。<sup>(39)</sup>圖四、8も大體同時代のものと思はれる。この饕餮の口のすぐ後に一羽の鳥

が後向きに表はされてゐる。圖四、7のごとき表現の傳統を襲つたものに違ひない。圖四、10は白鶴美術館藏の春秋後期の鑑の紋様である。中央の大きな頭を持つた龍——殷、西周時代の所謂饕餮の後裔——の兩側に、この場合もやはり龍に背を向けて一對の鳥が表はされてゐる。この鳥は冠羽を附け、明かに鳳凰である。これも西周以來の傳統を引いたものであることは疑ひなからう。圖四、9は春秋後期、新鄭出土の壺の紋様の一部であるが、絡んだ龍の傍に鳥が立つてゐる。これも右の系統と關係があらう。

殷中期の饕餮と組合はさつた原<sub>二</sub>龍身鳥首神<sub>一</sub>には、殷後期以後右に記したのとは異なつたもう一つ別の發展がたどられる。圖五、1は安陽侯家莊東區一四〇〇號墓出土の殷後期の爵から採つたものである。饕餮と、これに背を向けた龍身鳥首神が胴を共有してゐる形である。<sup>(40)</sup>饕餮と原<sub>二</sub>龍身鳥首神<sub>一</sub>の組合せが殷中期では甗と罍に見出されるのに對し、殷後期ではこの組合せの紋様がエクスルーシヴに爵に飾られてゐるのは興味深い。筆者は以前に殷周青銅彝器の特定の器種には一定の鬼神が飾られることにつき、次のやうに記した。<sup>(41)</sup>

例へば、甗の袋足には水牛<sub>二</sub>饕餮<sub>一</sub>（水牛の角をつけた饕餮）が排他的に用ゐられ、この種の饕餮が鬲鼎には多くても、普通の鼎には例外的にしか使はれないこと、鼎や尊には虎<sub>二</sub>饕餮<sub>一</sub>（虎と同様C字形の角をつけた饕餮）が絶對的に優勢であり、爵には圧倒的に鳥<sub>二</sub>饕餮<sub>一</sub>（鳳凰と同様は乙字形の冠羽をつけた饕餮）が多いことなどが容易に見出される……

と。ここに注意した饕餮と龍身鳥首神の組合はさつた圖像の例も、幾つか例のある特定の紋様と特定の器種との排他的結びつきの例に入る。

この圖五、1のごとき圖像も、圖四、1、2のごとき圖像から出自したものと解される。即ち、圖四、1、2の圖像は、注意深く觀察することによつて始めて饕餮と龍身鳥首神とから成り立つてゐることが知られるのであり、表はされた紋様としては、兩者は不可分の一體となつてをり、兩者の境界らしいものはどこにも意識的に表はされてゐない。先に引いた圖四、1、





圖5 所謂饗養ないし龍と合體した龍身鳥首神、鳳凰

2の例では、兩者はどこでもつながらず、切り離された形で表はされてゐるが、同様な圖像でも、圖四、4では、圖で黒線となつてゐる所が實物では凹線となつてをり、實物では圖で見るほど饗養と龍身鳥首神が分離したものとして目に寫らない。このやうな兩者の合體したとき表現の圖像を、殷後期の表現形式でもつて表はしたのが、圖五、1のやうなものであることは疑ひを容れない。鳥首が饗養に對して後向きになつた特徴にも殷中期の傳統が保持されてゐる。

圖五、2はセント・ルイス市立美術館藏の鐸の器腹を飾る紋様である。表現の手法からみて、西周前期末から中期初にかかる頃のものである。圖五、1で饗養の目の後にあつた胴の部分の長さがつづまり、龍身鳥首神が鳳凰に代置され、その胴と尾が饗養の頭上にかぶさつた形である。圖四、7の例で西周前期頃に饗養の後の龍身鳥首神が鳳凰に代替されたのと同じ現象が、ここにも認められるのである。

圖五、3は2と大體同じ時期の根津美術館藏の疊の肩の紋様である。翟鳳凰と龍が尾で一つにつながつてゐる。龍が、頭を尾の方にふり向けた姿勢で表はされ、胴のくねり方は甲骨文龍字に象られた通りの、本來の字義通りの龍である點、

さきの饗饗形に表はされた龍とは相違があるが、龍と鳳凰といふ組合せにおいては同類である。圖五、1、2の變異と見るこ  
とができる。

この式の龍と鳳凰の結合した圖像の傳統は、例證の數は多くないが戰國までたどることができる。即ち、圖五、4は春秋中  
期の泉屋博古館藏の疊<sup>(4)</sup>の肩に飾られた圖像であるが、紋様を構成する一單位をとり上げてみると、この時期によくある、S字  
形の胴をもつた兩頭龍の胴體の中途に、肉冠をつけた寶籙<sup>二</sup>鳳凰が連結され、連結點に目玉を表はしてゐるのである。圖五、  
5は戰國時代の帶鉤の意匠に使はれた例だが、大きな頭をもつた龍の左右に分岐した胴は、夫々一對の鳳凰の尾の一つになつ  
てゐる。鳳凰の向きが逆になつてゐる點を除けば、圖五、2の西周時代のモチーフの忠實な再現といつても過言であるまい。

圖五、6は輝縣琉璃閣第六〇號墓出土の玉器の拓本から採つたもの。時代は春秋末乃至戰國初ごろ、左右對稱形をなしてゐ  
るが、圖にくはしく寫した左半の圖像についてみるに、頂上にある龍頭から胴體をたどつてゆくと、左下の、乙字形の冠羽を  
もつた鳳凰頭に行きつく。龍、鳳凰兩者とも頭のすぐ後に足が表はされてゐる。これにもう一匹の龍が絡んだのが左半の圖柄  
である。かうしてみると、ここにゐるのも圖五、1に引いたと同様な、龍身を共有し、龍頭と鳳凰頭とを持つた鬼神である。

圖五、7の玉器の意匠にも、同様な鬼神が左右對稱に一對表はされてゐる。即ち、玉器の兩端には龍頭があり、それから出  
た胴をたどつてゆくと下中央部の鳥頭にたどり着くのである。前節において、龍身鳥首神の傳統が戰國を経て漢まで綿々と續  
いてゐることを證した。ここに、龍の類と龍身鳥首神の傳統も同様殷から戰國まで續いてゐることが知られた。

なほ龍身鳥首神や鳳凰が饗饗の類と組合せられてゐる事實をどう解釋するかについては、饗饗が何であつたかの解釋をまつ  
て始めて明かにされることである。従つて第十二章の終りの方に改めて記されるはずである。

#### 四、凹字形龍紋、所謂饗餮紋と凹字形龍紋

ここに凹字形龍といふのは、圖六、13—15のごとく、鼻先と尾の先がいづれも上向に卷いてをり、全形がいば凹字を横に引伸したとき基本形を持った龍を指す。

殷中期にはこの龍もかなり後期とは異なつた姿をしてゐる。圖六、1、2は出土地不明であるが、器形、紋様から明かに殷中期と知られる尊の腹部の紋様である。2の右方に所謂饗餮の半分が見え、その左にこれと相接してもう一つの圖像が表はされてゐる。目を中心に、左に二片、右に二片の羽根が不對稱に附いた形で、よくみると饗餮とは分離してゐる。圖六、3は鼎の頸に飾られた紋様で、その器形からみて殷後期にかかるものである。圖六、2にあつた紋様が遙かに細かく、複雑になつてゐるが、基本形に變りはない。目の上にはT字形の角が加はつてゐる。

圖六、6はレールのⅢ式のフリア美術館藏の罍の腹の紋様である。ここにもまた同じ圖像が饗餮の後に表はされてゐるが、頗る單純化された形をとつてゐる。圖六、7はレールのⅣ式の白鶴美術館藏の罍の肩の紋様。圖六、2以來、目から出て饗餮の後の方向にのびてゐた羽根は、ここに至つて龍の上下の顎と化し、龍の形に生れ替つてゐる。第三節の原Ⅱ龍身鳥首神、圖四、1、2が圖四、3、5の龍身鳥首神に變身したのと平行の現象である。圖六、2、3で饗餮の後に表はされた鬼神を、前節の例にならひ、原Ⅱ凹字形龍と呼ぶことにしよう。

なほ圖六、3では、饗餮の後に配され、これと分離して表はされた原Ⅱ凹字形龍の、饗餮の胸の下に入つた部分には、饗餮の足とみられるものが見出される。さうすると、圖六、3では饗餮と凹字形龍は、細かく見れば繋がつた所がないにしても、一體化したものと意識されたことが知られる。両者が殷後期にはつきりと饗餮と凹字形龍と分れた形をとつて表現されるやうになつても、圖六、4のごとく、凹字形龍の胸が饗餮の足の後に接續してゐる表現があるのは、この傳統を引いたものに違ひ

ない。また、圖六、5は殷後期、レールのIV式の壺の腹部の紋様である。饕餮の後には全體がL字形をなし、目と角がその曲り角の所にある、變つた鬼神が見られる。圖六、3と比較してみると、圖六、5で目から上に立ち上る丈の高い羽根に當るものは、目立たない形ではあるが圖六、2、3にも見出される。従つて5のごときものも6などとは別な形で2、3が單純化された結果生れたものであることが知られるのである。

圖六、8、9は嘉山泊崗出土、圖四、1と同じ甌の足及び腹上部の紋様である。8の饕餮の後にも、圖六、2、3と相近い、目の左右に不對稱形の羽根の出た鬼神が表はされてゐる。兩者の違いは、8では目の右下に下顎と鼻面を表はすと思はれる渦紋があることと、目の眞横から右に棒狀の線が出て、饕餮とつながつてゐることである。同じ器の紋様、圖六、9は、8で饕餮の後に配されてゐた鬼神を、單獨に表はしたものと考へられる。目の右下の下顎と鼻面、目の眞横に出る棒狀の線——この場合は何にもつながつてゐない——も8と共通してゐる。9の目の眞横に出る棒狀の線の上にある横長の羽根は、8では饕餮の胴と尾に合體してゐるといへよう。圖六、9のごとき圖像は、前に引いた圖六、2と同じ器の肩に附けられた圖六、1から出たものではなからうか。1にも特徴的な顎と鼻面に當るものが目の下に表はされてゐる。

殷中期に圖六、8のごとく、饕餮の後に配され、頭をこれと同じ方向に向けた鬼神は、殷後期では饕餮の後に多く表はされてゐる小さい龍、カールグレンの vertical dragon と呼ぶものに變身したと考へられる。若干の例を引けば、圖六、10はレールのIV式の盃、11はレールのIV式とV式の混合式の、白鶴美術館藏の卣、12は典型的なV式の鼎から採つた。圖六、8、9にあつた、目の横から出る棒狀の線は、隣接した饕餮に吸収されてしまつた、とも解釋できるが、或ひはさうではなく、次のやうなことを考へるべきかも知れない。即ち、圖六、2、3と1、8、9は、目の下の下顎と鼻面に當る渦紋や、目の横から出る棒狀の線の有無によつて區別し、その發展の系列を別別にたどつてみたが、兩者とも殷後期には同じ凹字形龍に變化してゐることが知られた。さうすると始めに認めた形の相違は非本質的なものであつた、即ち顎と鼻面に當る部分とか目の横の棒狀の線はこの鬼神に特有な身體部分ではなかつたのだ、と。ここにはこの方の解釋をとり、8、9に示すごとき鬼神も、2、3

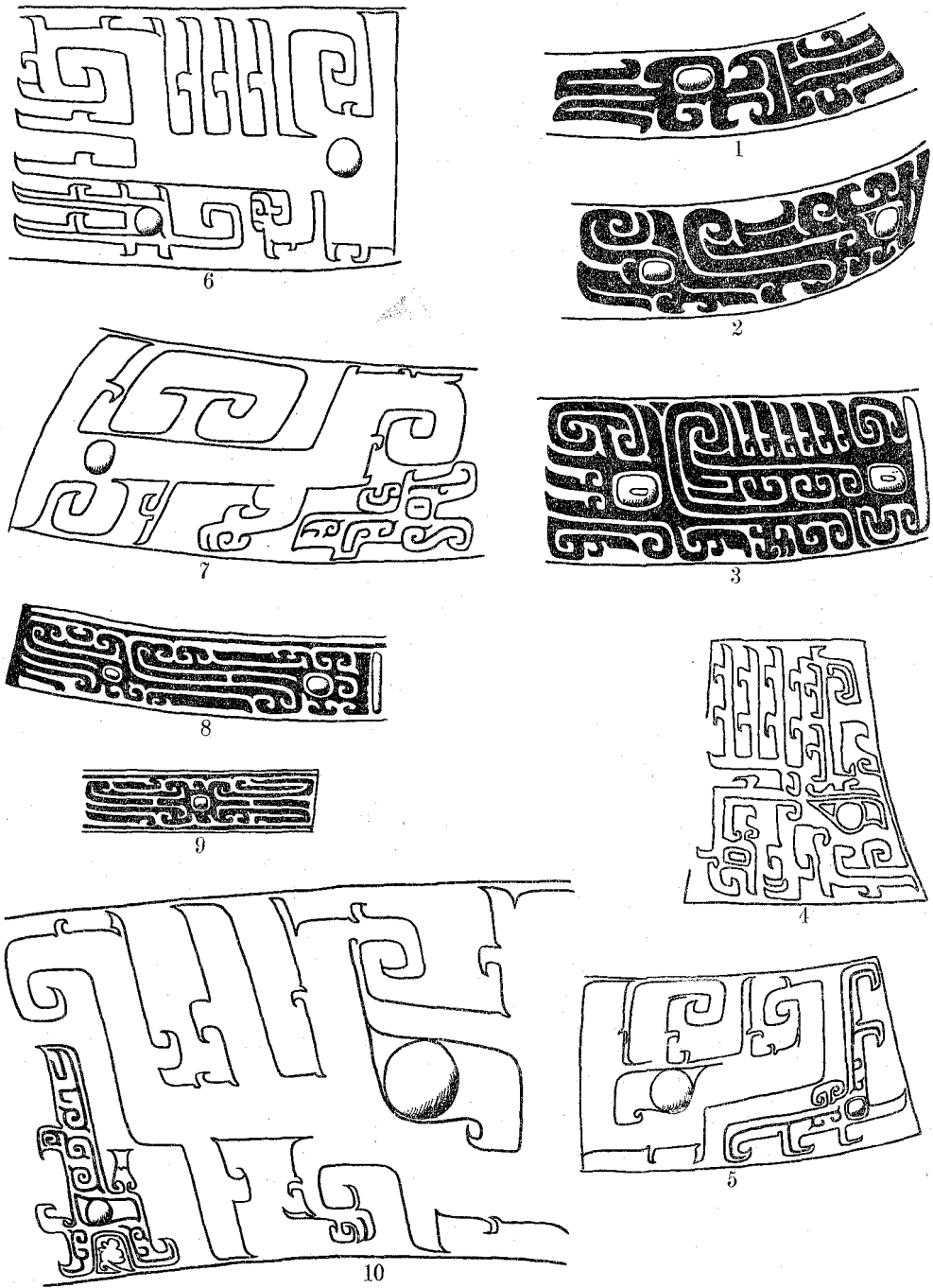
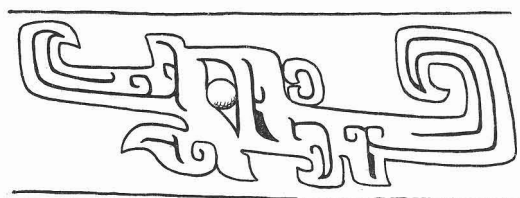
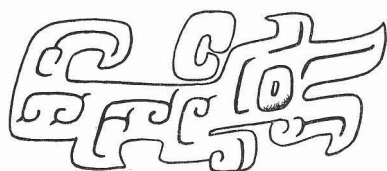


圖6 凹字形龍，所謂鑿鑿と凹字形龍



14



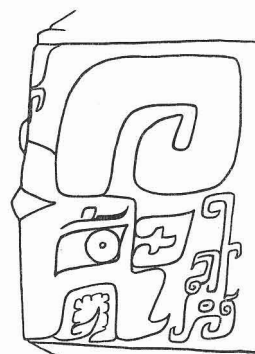
15



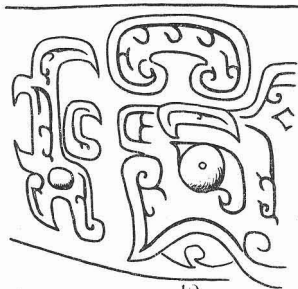
16



17



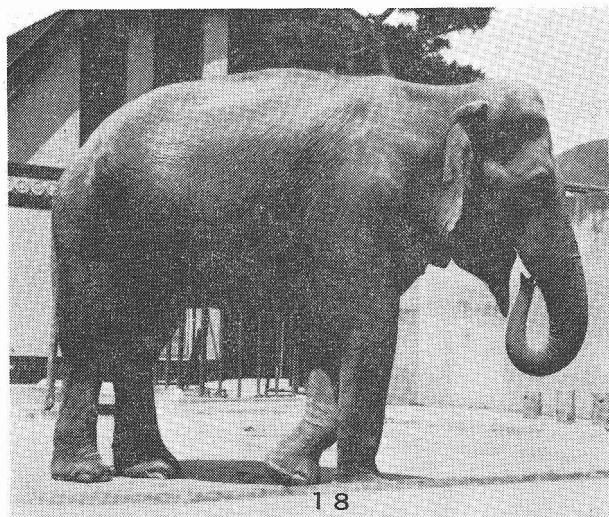
11



12



13



18

圖6(つゞき) 凹字形龍, 所謂饕餮と凹字形龍, インド象

と同様、原<sup>二</sup>凹字形龍と呼ぶことにする。

殷後期にも、中期と同様この凹字形龍はよく饕餮と組合はされずに用ゐられてゐる。圖六、13は殷後期初と思はれるレールのⅢ式の方鼻の足に飾られた例。14、15は夫々安陽侯家莊一〇〇四號墓出土の牛頭方鼎及び鹿頭方鼎から採つた。これはレールのⅣ式。鼻先はかなり長いもの、さう長くないもの等、ここに引いた以外にも變化は多い。15は足がある例である。殷後期になると龍身鳥首神に足が出て、多少とも動物らしい形をとるに至つてゐるのと同様な現象である。

西周前期にもこの凹字形龍は饕餮と共に用ゐられるものがあるが、急に稀少となつてゆく。一方西周前期には圖六、16、17のごときものが新たに出現する。前者は濬縣辛村第六〇號墓發掘の卣の頸の紋様、後者は泉屋博古館藏の卣の頸の紋様である。容庚はこの式の紋様を象紋の中に分類してゐるが、象そのものの紋様ではない。圖ではつきりわかるやうに、尾が巻き上つた龍の鼻先に、上に卷いた象の鼻の形が羽根を以て象られてゐるのである。凹字形龍は例へば圖六、9に見るごとく、鼻先から前方に羽根が出てゐる。殷後期のものでも、圖六、14の例などは、鼻先そのものが長くのびてゐるといふより、鼻先に長い羽根が一葉ついた形である。

殷中期におけるその原形は羽根であり、後期にも羽根を以て象られてゐるにしろ、長い鼻先の形を以て誰しもが連想するものは、象の鼻である。圖六、14などが、たとへ鼻先に刀狀の長い羽根を附けた形で表はされてゐるにしても、これが同時代に象の鼻と意識されたであらうことはその下顎の形から決定的に知られるのである。即ち、このやうな、先端が尖り、下に垂れた下顎といへば、象のものをにおいて他にないからである。圖六、18に示したのは京都市立動物園のインド象である。觀察してゐると、下顎の先端は寫眞に寫つてゐる形よりも更に下に垂れ曲り、丁度圖六、14のごとき形になることがある。圖六、11—17のごとき、殷後期から西周前期の、多少とも長い鼻先をもつた凹字形龍の尖つた下顎が、象の下顎を意識したものであることはほぼ疑ひない所である。圖六、16—17はこのやうな前代からある鼻先が、新しく更にリアルな形で表はされたものと解釋することができよう。

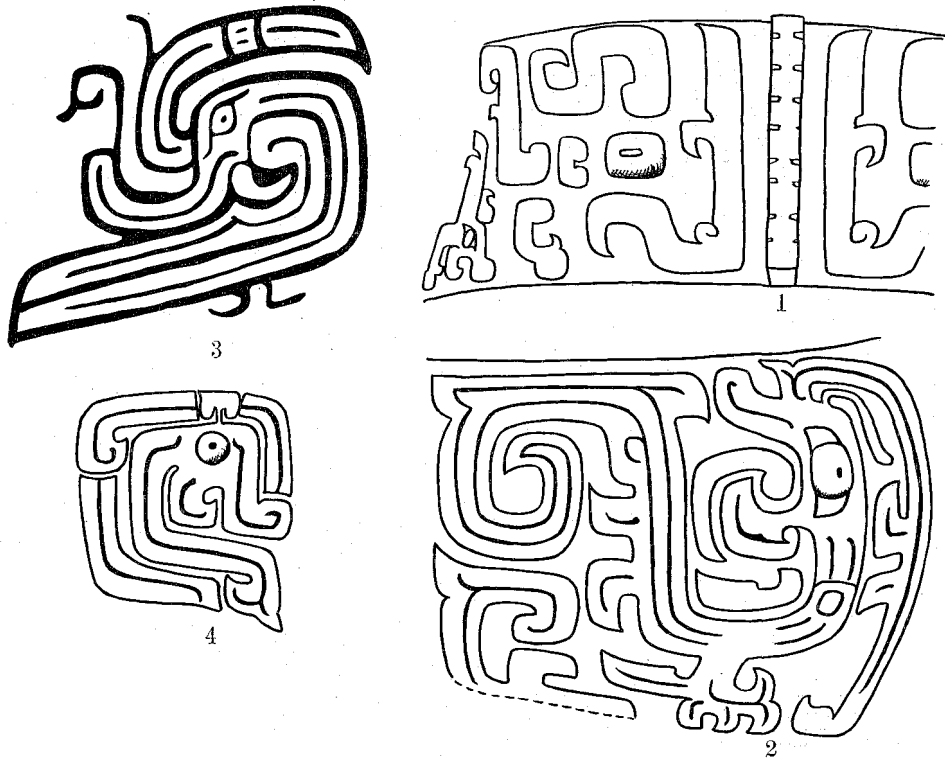


圖7 鼻面に長い羽根の附いた龍の屬

なほ、鼻先に羽根が着くのは、何も今問題の凹字形龍に限られないことは注意しておく必要がある。所謂饗饗の鼻筋に盾形のもの立つてゐるが（例へば圖六、10、最右部）、これは羽根を二枚背中合せにしたものをここに附けたもので、これが後の時代の龍にも長く残り、特別な象徴的意味を持つものとされてゐたことは、以前に筆者が注意した所である。<sup>(45)</sup> 圖七、1はアトキンス博物館蔵の殷時代の壺の頸の紋様から採つたものである。通常二枚合はさつてゐる羽根が分離し、左右の饗饗面の鼻面の先に立つた形に表はされてゐる點珍らしい表現である。右に記した趣旨の説明に丁度よいので引いた。鼻先に羽根の出た龍の表現は西周中期以降につづく。圖七、2は西周中期の琺瑯生鬲の例、3は扶風出土の西周後期、柞鐘の例、4は陝縣上村嶺第一六三一號墓出土の鬲の例で、一については別に説明を要しまい。ただ、圖七、2—4の龍は體の屈曲の仕方が圖六にあげたものと異なつてゐる。龍がその屈曲した體の畫く曲線によつて名を異にしたことは先に筆者が説明したところである。<sup>(46)</sup> これらは鼻先に長い羽根が附いてゐるとはいへ、異なつた種類の鬼



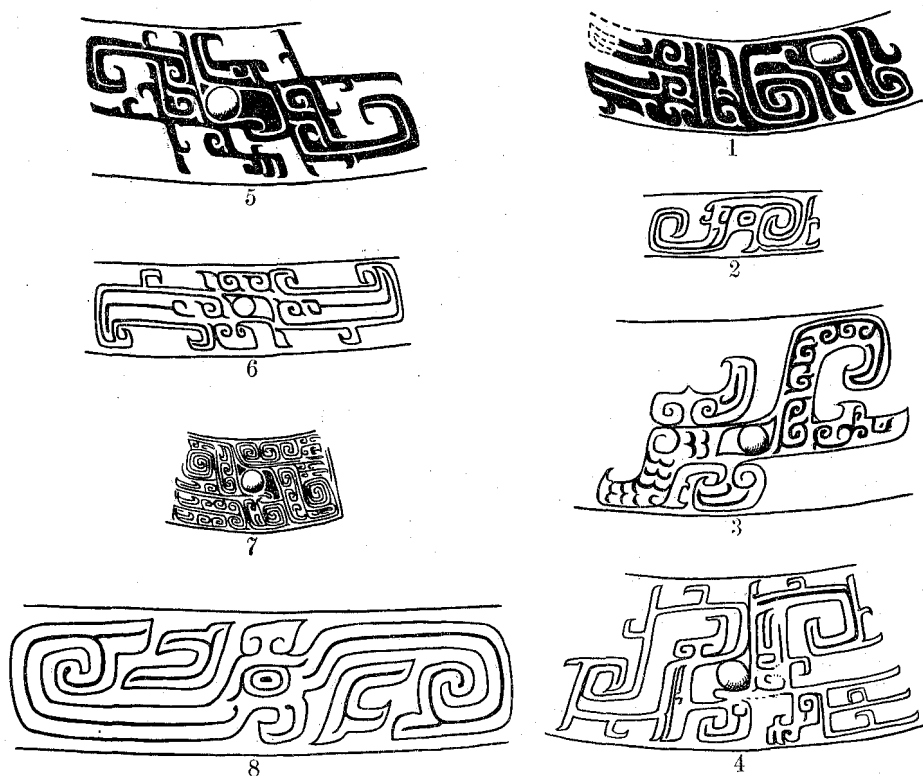


圖8 S字形反鼻龍

神なのである。

## 五、S字形反鼻龍紋

ここに記すS字形反鼻龍とは、前節に記した龍と同様、鼻の先が上向に反りかへつてゐるが、尾の方はこれと相違して上から下に巻き込んでをり、全體がS字を横倒しにしたやうな形をなすものである。

圖八、1は鄭州白家莊第三號墓出土の尊の肩の紋様である。圖二、1と一見よく似てゐて區別が難かしいやうにも思はれる。然しよく見ると、圖二、1の鳥の嘴に相當する部分は、圖八、1では嘴といふには目乃至頭に比して不釣合ひに大きすぎ、上下の嘴に當る部分はそこから出る羽根の根本を一緒にして渦紋狀に深く巻き込んでゐて、到底鳥の嘴とは見得ないのである。圖八、2は遠東博物館藏、レールのⅢ式の鼎の頸の紋様である。鼻先は長く、上向に巻き、目のすぐ後から先づ水平に、次いで下に巻き込む胴乃至尾とも言へる部分が出、その下から羽根が出てゐる點、表はされた

様相に大きな相違があるが、1の後裔であることは疑ひない。圖八、3はこれよりやや後れる時期の上海博物館藏の甌の肩の紋様である。頭上には角が加はり、胴を頭の線より高くはね上げてゐる。4はレールのIV式の泉屋博古館藏の尊の肩の紋様で、3と同じ姿勢で表はされてゐる。頭上に3と同様な角が見える。足が加はつてゐる。圖八、5も同時期の甌の肩に表はされた同類の鬼神であるが、下顎がない。この器は南昌の西漢墓から出た點珍しい。6も4と同時期の泉屋博古館藏の簋の足の紋様である。これは1、2と同様胴をはね上げない形である。目の形でわかるやうに、右が鼻先であるが、目を中心に胴と鼻先が對稱に近い形に表はされてゐる。

圖八、7は安陽小屯第二三三號墓出土の觚の足の紋様である。細い線で表はされた羽根の線で以て畫かれた圖八、3、4式の龍を辨別することが出来るであらう。このやうな細線で表はされたS字形反鼻龍は、他にも例へば上海博物館藏の西周前期頃に降る疊(47)の頸にも見出される。圖八、8は西周後期、函皇父鼎の頸の紋様である。これが現在のところこの式の龍の紋様としては最も時代の降る例である。

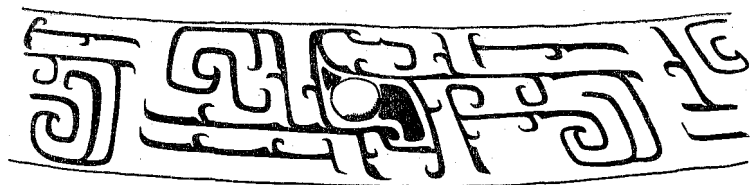
## 六、S字形垂鼻龍紋

この節で扱ふのは、前節の龍と同様全體がS字を横倒しにした形をなすが、ただ前後が逆になつた類である。即ち、前方に長く延びた鼻先は下向に曲り、尾の先は上向に反るのである。

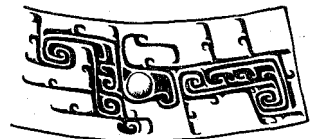
圖九、1は黃陂盤龍城出土の殷中期の罍の紋様で、今問題の龍が饕餮の後に配されてゐる。これは湖北省出土であるが、同様な例は中原地方にもあり、例へば安陽、洹水の傍から出土したといはれる盃(48)にも見られる。目の形からみて左が前である。一見次節に記す罍兩紋の原形となつた紋様(圖一〇、1)とまぎらはしいが、よく見るとこの方は後に餘分な羽根が附いてゐて前後不對稱であり、目のある頭部の表現にも上下で相違があり、その點罍兩紋の方が目を中心にして上下前後が對稱形をなす



圖 9 S字形垂鼻龍



19



20

圖9(つゞき) S字形反鼻龍とS字形垂鼻龍の間の子

のと著るしい差異が認められよう。圖九、2は嘉山泊崗出土の鼻の肩の紋様である。1よりも表現が線的になつてゐる。1で目の上にあつた釣状のものは、ここでははつきり角の形を成してゐる。圖九、3は殷後期でも早い時期のものと思はれる甗の肩の紋様である。目の形をみると、左に白目の内端、蒙古褶の誇張された表現かとも思はれる杏仁形があり、左が前かとも思はれるが、さうではあるまい。目の上方に、體から離れた所に羽根が一條曲線を畫いてゐるが、これを圖九、19、20の對應する部分の表現と比べてみると、これが角の外側の輪廓線であること、従つて19、20と同様、右が前であることが知られるのである。

圖九、4は典型的なレールのⅢ式の方鼻の口縁の下の紋様である。長い鼻面の基部に先の尖つた上反りの小さい下顎が付き、象から採つたと思はれる動物的な特徴を具へてゐる。第四、五節に記した龍が、この期に至つて象らしい鼻と下顎を持つやうになると平行の現象である。圖九、5は江口治郎氏藏の象牙容器に彫られた紋様である。安陽侯家莊一〇〇一號大墓出土の象牙平底盃形器にこれと近似した紋様があるが、製圖の便宜上この方を示した。レールのⅣ式平行の様式である。象牙彫刻であるため表現形式に相違はあるが、ここにも4と同様な圖像が認められよう。同様レールのⅣ式であるが、

尾と鼻先が極端に長くなつたものもある。圖九、6はド・ヤング記念博物館藏の甗の頸から採つたものである。圖九、7は安陽大司空村第二六七號墓出土の甗の足の上部の紋様である。殷後期にはこのやうに鼻の先端が二叉になり、象の鼻の特徴をはつきり示したものがあり、この特徴は8のごとき西周前期のものにも引きつがれてゆく。7にはまた鼻に象の鼻の皺を表はしたと思はれる線があるが、これはまた圖九、9に示したごとく鱗紋の形で表はされることもある。

圖九、10は長安普渡村出土の長由盃の頸の紋様である。同出の簋、盤にも同じ紋様がある。いふまでもなく西周中期のものである。今問題の龍を同方向に二匹並べ、目玉で連結して一つにしたものである。このやうに二匹繋いだりせず、一匹づつ表はすことは西周後期にも例がある。圖九、11は永壽出土の孟の口縁下の紋様である。<sup>(50)</sup>西周後期の表現形式でもつて同じ類の龍が表はされてゐる。

これ以降このやうな龍の直系の子孫と思はれる表現は今のところ見出されない。圖九、12は戰國時代の壺の脚に附けられた紋様である。長大な鉤狀の鼻のついた上顎と、上反りの小さい下顎を持つたこの龍は、11のごときものの遠い子孫である可能性が大である。

第四節で記した凹字形龍は殷後期に足を持つたものを派生してゐる。このS字形垂鼻龍にも、殷後期には圖九、13のごとき足のあるものが現れる。レールのV式である。圖九、14は長安普渡村出土の爵の流につけられた紋様である。西周前期末頃のものと考へられる。鼻から出て後に向ふ長短二本の羽根及び足から後向に出る長い羽根をむしつてみれば、13と同様な圖像が姿を現す。これより後の時代にはこの足のある類を探し出すことはできないが、圖九、15の戰國時代の鏡につけられたものは、或ひはこの類の生き残りかも知れない。コンマ狀の角、上下の顎の形、體の前に出る足など、共通の特徴が残存してゐると解釋できるからである。

圖九、1、2のやうな紋様からは、前記の系列とは別に、16—18のごとき別途の發展をたどることができる。16はフリア美術館藏、レールのIV式の壺の頸の紋様で、1、2と同様下顎が発生してゐず、單純なS字形の原形を保持してゐる。角もない。17は大體同じ時期の簋の頸の紋様で、同様な鬼神を表はしてゐる。角がある。18は泉屋博古館藏、西周前期末頃の鼎の紋様でやはり同じものが表はされてゐる。この系統がこれより後どうなつていつたかについては今の所資料が缺如してゐる。

なほ圖九、3とよく似たもので、19、20のごとき類がある。前者は泉屋博古館藏の甗、後者は臺北の故宮博物院藏の甗のいづれも肩の紋様で時代も大體同じ頃のものである。以上述べた類との相違はその尾の屈曲の方向にある。即ち19、20では尾が

下向に曲つてゐて第五節のものと同じであり、この節で述べて來たものと反對向けなのである。尾も鼻も下に卷くからS字形とはいひ難いが、いはば前節の類とこの節で扱つたものの間の子といへるから便宜上ここに附載した。

## 七、罔 兩 紋

ここに罔兩と名づけた紋様は、目を中心にして上下左右對稱な形の頭部とも呼ぶべき部分があり、その左右に對稱形の長い羽根のついた形をもつたものをいふ。これを罔兩と呼ぶわけはこの節の終りに記される。

先づ殷中期以降におけるその發展の状況を見てみよう。圖一〇、1は鄭州白家莊二號墓出土の盤の器側の紋様である。紋様帶を構成する一單位についてみるに、目の上下を短い羽根がおほひ、左右には對稱形に長い羽根が出てゐる。圖一〇、2は殷後期の早い時期に屬する臺北の故宮博物院藏の甌の足の紋様である。目の上下に短い羽根が二ひらづつ出、左右には對稱形に長い羽根が出てをり、1と同じ種類の鬼神である。3もレールのIV式の壺の足の紋様である。左右に出る羽根が夫々全體にS字形をなしてゐる點特異である。4も様式上ほぼ相近い時期と考へられる白陶の紋様であるが、やはり左右に同式の羽根が出てゐる。3、4はやや特異なものでこれについては後に(四二頁)再びふれることにして、例が頗る多いのは2のやうなもの、及び圖一〇、5—7のごとき殷後期の彫骨の竊に表はされる單純な形のものである。

西周前期の例は多くないが、圖一〇、8のごときものが擧げられる。泉屋博古館藏の簋の臺に附けられたものである。圖一〇、9は西周前期末—中期頃の、出光美術館藏の簋の足の紋様で、細い線で表はされ、羽根、渦紋の中に埋つてゐる。

圖一〇、10は白鶴美術館藏の西周中期の壺の蓋の縁に飾られた紋様である。8のやうなものの、目のある部分を九〇度近くねぢつた形で、以後この形が長く續くことになる。圖一〇、11、12は臺北故宮博物院藏、西周後期、殷句壺の蓋のつまみの中底、及び蓋の縁の紋様から採つた。この時期の典型的な例である。圖一〇、13は泉屋博古館藏の甌の頸の紋様で、春秋前期頃

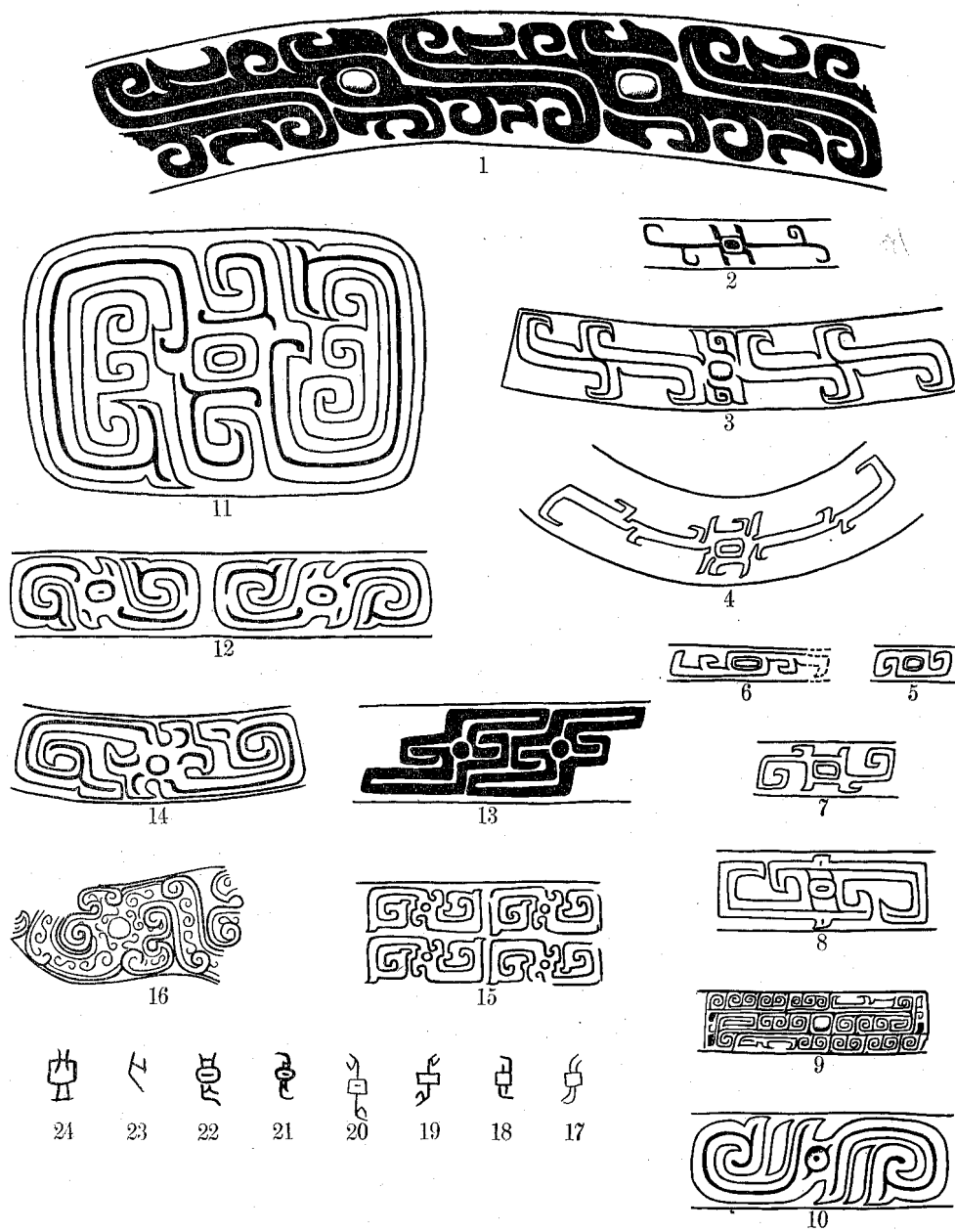


圖10 隅兩紋および關係文字資料

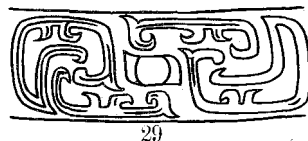
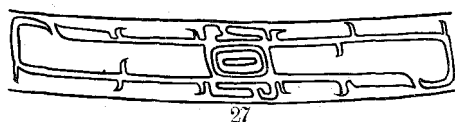
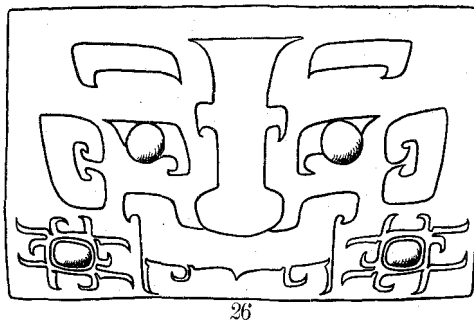
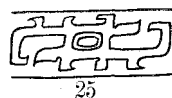


圖10(つゞき) 複羽罔兩紋

のもの。その特異な器形から、文化の中心地から外れた地域で作られたものと知られる。罔兩が1と同様な方式で重ね合され、連続した帯状の紋様を形成してゐる。圖一〇、14は春秋中期、新鄭出土の簋の紋様であるが、この時分まで殆んど變らない形で存続してゐることが知られる。圖一〇、15は器形より戦國時代と知られる簋の紋様で、地紋の一單位として扱はれてゐる。この邊が最も時代の降る用例である。

他に、圖一〇、16のごときものがある。侯馬出土の陶模で、春秋後期乃至戰國初のものである。目を中心にした一種の頭部から兩側に出る羽根は隣のものとながり、連續紋様になつてゐる。この陶模は不完全だが、出土データ不明の青銅器に同様な紋様の完全な形がみられる。<sup>52)</sup>

右に記したものとよく似てゐるが、左右に出る羽根が一本でなく、長短の二本になつた類がある。複羽罔兩紋と呼ぶことにしよう。圖一〇、25は安陽侯家莊一〇〇一號墓出土の殷後期の骨製の柶から採つたもの。26はミネアポリス美術館藏の、同じく殷後期の方宙の腹の紋様である。饗養の兩脇に配されてゐる點が珍しい。左右に出た羽根に長短の差がない所も特異である。27は安陽四盤磨村第四號墓出土の簋の頸から採つたもの。殷後期頃と思はれる。28は濬縣辛村第六〇號墓出土の宙の提梁から採つたもので、いふまでもなく西周前期のものである。これらはとり立てて説明すべき特別な點もない。29は鼎の頸の紋様で、紋様表現の様式からみて西周中期のものである。各部が分解してばらばらになつてゐる。この邊が現在知られるこの式の罔兩



紋の最も時代の降る例である。

以上相近い形ではあるが小異のある囙兩紋を二種提示してその變遷をたどつてみたが、次にこれを囙兩紋と呼んだ理由を説明せねばならない。唐蘭は篆文「良」字から西周金文の字體を経て圖一〇、17、19の甲骨文に遡り、これらが「良」の字であることを證し、この甲骨文は圖一〇、24の甲骨文から變化したものと考へてゐる。確かに篆文「良」字（圖一〇、22）は金文季良父盃の「良」字（圖一〇、21）から譌變した形と考へられる。またこの金文「良」字は圖一〇、17と19の兩者を混合したやうな形であるが、どちらかといへば後者の體から出たと考へるべきだらう。17の體から、21にみるごとき、上下に出てゐる一對づつの線を結び合せる線が生じてくるわけがないからである。なほ唐蘭が圖一〇、17の體から19の體に變化したといふのは後述のごとく兩者が同時期に併存して別の用法で使はれてゐることからみて誤りである。また圖一〇、17の體が同圖24の字から生じたといふのも、李孝定のいふごとく<sup>(54)</sup>兩者の用法が全く異なつてゐる所から別字と見るのが妥當である。

さて甲骨文「良」字（圖一〇、19）はまた圖一〇、20にも作られる。中央の方形の中に點が加はつてをり、これが目を象つたものであることが知られる。その上下に出てゐるもの（圖一〇、23）が羽根の先端部の幅廣い部分を記號的に表はしたものであることは第九節に記すごとくである。さうするとこの甲骨文「良」字が目の兩側に羽根の附いた圖像、圖一〇、2—7のごときものを象つたものであることは疑ひない。方向に縦横の相違があるが、「犬」、「虎」字など、象る對象が横長のものを九〇度回轉させた形に書くのは甲骨文の常である。一方唐蘭が圖一〇、19と共に「良」字とした17、18の方は、同様にして圖一〇、25—29のごとき複羽囙兩紋を象つたものと知られる。

圖一〇、19と17の兩體はそれらの象つた原の圖像に小異があるやうに、甲骨文字としての用法にも相違が認められる。どちらも第一期に個有名詞として使はれる點は同じである。然し19の方は人名として甲橋刻辭に卜甲の納入者名として使はれ、<sup>(55)</sup>また他にも人名らしい用法が多く、<sup>(56)</sup>一方17の方は婦名として卜辭、骨臼刻辭に使はれ、<sup>(57)</sup>他に人名らしい用法もあり、<sup>(58)</sup>また地名の用法もあるが、<sup>(59)</sup>17、19兩者が同じ人、地を指したと認むべき證據は別にないのである。つまり殷後期には圖一〇、17と19が別

な文字として使はれ、従つてそれらの文字の象られたものと圖像の方も別のものと考へられてゐたであらうことが推測されるのである。

右に記したところによつて圖一〇、2—15に示したごときものが同時代に「良」といふ名で呼ばれたことが知られた。「良」といふ名の鬼神といへば直ちに思ひ出されるのが方良である。方良は『周禮』夏官、方相氏「大喪先匱、及墓入壙、以戈擊四隅、馭方良」の注に

方良、罔兩也

といふ。罔兩は『國語』魯語、下に

丘聞之、木石之怪曰夔罔兩

といはれる罔兩である。注に

罔兩山精、倣人聲而迷惑人

とある。木石の怪、山の精といはれ、その形については『説文』に

罔、罔兩、山川之精物也、淮南王説、罔兩狀如三歲小兒、赤黑色、赤目長耳美髮

といひ、以下魯語を引用してゐる。これによると三歳の小兒のやうな姿である。

一方罔兩にはこれと異なり、

罔兩、景外之微陰也

といふ説明もある。『莊子』齊物論の「罔兩問景曰……」の郭注である。物の影の周圍にあるぼんやりした部分だといふのである。これはいかにも抽象的な意味のやうだが、問答をしてゐるのだから物理的な影ではなく、この場合は薄い影の精靈と見るべきである。罔兩に問ひかけられた景、即ち物の濃い影の方も單なる物理的な影そのものでなく、その精靈であることは、その答への臺詞からうかがはれる。即ち

吾待蛇蚺蜺翼邪（彼らによれば、僕は、蛇が蚺で腹ばい、蜺が羽で飛ぶように、うろこか羽でも必要とするということになるのであろうか）<sup>(60)</sup>

とある所をみると景は影の精靈で、一般人には蛇のやうな腹のうろこや蟬のやうな翼をもつて動きまはるものと考へられてゐたことが知られるのである。ここに出て来る罔兩の方はどのやうな四肢を持つものと考へられたか、『莊子』の文には殘念ながら知る手がかりがない。ただ景の方から類推して、やはり一定の形の四肢を持ったものと表象される精靈であつたことは疑ひなからう。罔兩の語には朦朧の意味があるから、今問題の、目の兩側に羽根の出た、何ともつかない形の鬼神は、この名にふさはしくないこともなからう。ここに罔兩と名づけた鬼神は圖一〇、15に示すごとく戰國時代までその圖像をたどることができるから、その名稱が圖像と結びついて『莊子』齊物論前引の條の作られた頃まで殘存してゐたことは十分に考へうることである。

「良」字が象ることにより、殷時代に「良」と呼ばれたことの確かな鬼神が、それでは後の時代に何故「方良」「罔兩」と呼ばれるやうになつたかについては、現在の所確かな證據によつて論證することが出来ない。ただ、興味深いのは次のことである。即ち「良」字は『說文』畠部に

良、善也、从畠省、亡聲

とある。「畠の省に从ふ」といふのは、古い字形についてみれば明かに誤りであるが、亡に从ふといふ方は甲骨文字からみて確かにさうである。甲骨文良字（圖一〇、19、20）は前記のごとく目と圖一〇、23の形一對から成り立つてゐるが、後者は甲骨文の亡字なのである。<sup>(62)</sup>良が亡の聲に从ふとすると、罔兩の罔も亡の聲に从ふ字である所から考へて、後世の罔兩の呼稱は、殷時代の同じものに對する名稱「良」をただ引き伸して發音したものにすぎない、といふことができるのではなからうか。<sup>(63)</sup>

## 八、井

## 紋

圖一一、1は鄭州殷遺蹟の陶片から採つた。採集品であるが、ここに寫した紋様と並ぶ四紋の表現を、鄭州白家莊第二號墓出土の尊に見るものと比べてみると、中心から花瓣が出た形に表はされてゐる表現技法が共通してゐる。これが殷中期のものであることは疑ひない。さて圖一一、1に見る紋様は、中心に目があり、その左右に二枚一組になつた羽根が一對附いた形である。2は殷後期、レールのⅣ式の盃の腹上部につけられた紋様である。1の圖像を、九〇度回轉した方向に表はしてゐる。圖一一、3は前からよく引く安陽侯家莊一〇〇一號墓から出た骨柶の一つに彫られた紋様。1と同様横位置であるが、上下にも一對づつの小さい羽根が出てゐる。起原的には左右の長い羽根の根本から出る枝であつたのか、これとは別のものであつたのか明かでない。ともあれ型式學的にみて3の形から殷後期の青銅器に見る4、5のごときものが發展して來たであらうことは疑ひない。4は殷後期、レールのⅣ式の尊の腹の紋様で、目の周圍には一對づつ組になつた羽根が左右ばかりでなく、上下にも附いてゐる。5は西周前期に降ると思はれる簋の頸の紋様で、1、2と同様、四紋と交互に配されてゐる。4で最大限に込み入つた形で表はされてゐた羽根は、ここでは3と同様、最も簡略な形である短い刀狀をとり、四隅の隣り合つた羽根が組み合はさつて四つの蟹の螯形を形造つてゐる。6は洛陽東郊から發掘された尊の腹の紋様で、伴出の戈の型式、彝器の銘文の字體などから西周前期のもの知られる。5で蟹の螯狀をなしてゐた二枚一組の羽根は、一對の間の境界が丸くなり、境目のない三日月狀のものに變つてゐる。<sup>(65)</sup>

これ以降、この紋様がどうなつていつたかについて、現在のところ證據を見出すことができない。圖一一、7は戰國時代の壺の紋様であるが、紋様を形成する一單位は目と、その周圍に附いた四枚の羽根狀のものを方形にまとめ上げたものである。羽根が二枚づつ對稱形の一組とならず、目の周りをめぐつていはば同方向に四枚配せられる點、1—6と相違があるが、方形

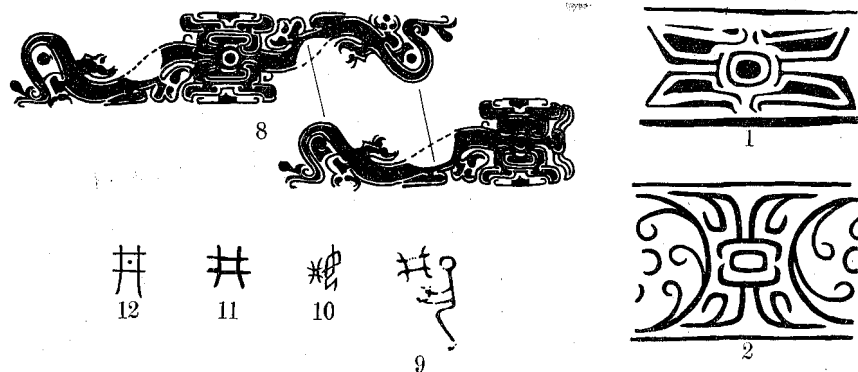


圖11 井紋および關係文字資料

にまとめられた目と羽根といふ點が共通する。或ひは關係があるかも知れないと思つて引いた。圖一一、8はカールグレンが指摘することく、<sup>(66)</sup>確かに1—6の系統に屬するといへよう。ヴェッセン氏蒐集の金、銀、トルコ石象嵌の戰國時代帶鉤の紋様である。圖に見るごとく、目の周圍に四枚の羽根が附いた方形の部分があり、その左右に一對の胴體の附いたもの、及び一方に一つの胴體の附いたものが組み合はされてゐる。——ごたごたするのでこの圖では引き離して示した。胴は龍のやうにくねり、足が三本見えてゐる。もう一本は重なり合つた部分にあるはずである。胴には羽根狀のものが附く。右下に示した方には、方形の部分の右に鬚の出た鼻面のやうな部分が加はつてゐる。これらは、龍のやうな肢體を具へてゐる點、鬼神らしさを加へてゐるとはいへ、この目と羽根を組み合はせた頭部ともいふべき方形の部分は、殷西周時代のもの傳統を引くものであることは疑ひない。<sup>(67)</sup>現在の所資料は發見されてゐないが、1—6のごとき鬼神が西周以後戰國時代までどこかで棲息し、發展を續けてゐたと考へる他なからう。

さて、この節の見出しにこの紋様を井紋とした。この紋様を記號化したのが「井」の字と考へられるからである。井の字は『説文』井部に

井（圖二、12が篆文）、八家爲一井、象構韓形、・轡象也、古者伯益初作井

といふ。「井（どんぶりではない。井の本字）」の字は井戸側の木を象つたもので、中の・は井戸水を汲むかめを象つたのだ」といふのである。井といふ字の古い資料を點検してみると、西周金文では圖一一、11のごとく縦の二本が外反りになつた字體があり、殷時代甲骨文では女名の舛として使用例が多數あり、縦ばかりでなく横の二本も外反りになつたものが多く見られる（圖一一、10）。一體井桁を象つたといふのなら、何故かう四邊の劃が曲つてゐるのであらうか。井桁の木材なら當然大體眞直でなければならぬからである。かうみると井字が井戸を象つたといふ『説文』の説は頗る疑はしい。

それでは井字は何を象つたものであらうか。圖一一、9は臺北故宮博物院藏の簋につけられた圖象記號で、『三代吉金文存』の目錄には舛と釋され、容庚は『武英殿彝器圖錄』の考釋に「象人奉井形」と説明してゐる。<sup>(70)</sup>ここに井と釋された字形は確かに容庚や羅振玉が正しく判斷したごとく井字に當る要素で、縦横の劃とも外反りになつてゐて甲骨文井字と同じものと見られる。ただ、圖象記號の常として文字よりも丁寧には表はされてゐる。そして外に反つた縦横の劃の兩端で形成されてゐるのは、圖一一、3、5の目の四隅に見られる形なのである。圖一一、3を成るべく手早く表はさうとしたら、誰でもこの圖象記號に見る形に、更には圖一一、10にあるやうな形に書くに違ひない。かうみると、井字が本來井戸側などでなく、圖一一、3のごときものを象つたであらうことはほゞ疑ひない。

井字を、この節に井紋とした圖象を象つたものと見るによつて、井字の中央に打たれることのある點の意味もうまく説明できるやうになる。即ち、井字の中央部は目に當るわけだが、點は瞳子なのである。甲骨文の井で點のある體は今のところ見出せないが、金文には禹鼎その他幾つもの例がある。<sup>(72)</sup>『説文』にこの中央の點が井戸水を汲むかめを象つたといふのは、いかにも馬鹿らしい説明である。

甲骨文の井は𠂔、即ち「井といふ氏族から嫁に來た夫人」<sup>(73)</sup>といふ用法で甲骨文に多く現れることはいふまでもない。この甲骨文の井が井紋の圖像記號を文字化したものとすると、井といふ氏族は井の地に住み、この井紋を圖像記號として持ち、更に恐らくはこの井といふ鬼神の祭祀を行つた人達であつたと考へられるのである。<sup>(74)</sup>ただ、井といふ文字で名づけられ、圖一一に示したやうな形態のものだとされる鬼神については、現在の古典には記録が残つてゐないやうである。

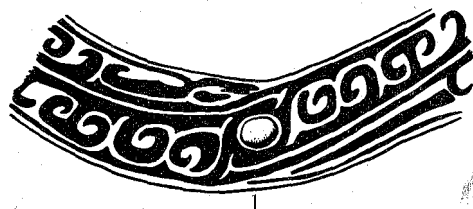
なほこの井といふ鬼神は目の周圍に二對乃至四對の羽根を集めたもので、目の周圍に二枚乃至四枚の羽根を對稱形につけた罔兩——ただしこの方は通常横長の形にまとめられる——と形態の上で親縁性が認められる。そこで思ひ起されるのは先に引いた『莊子』齊物論の罔兩と景の對話である。『莊子』に出て來る罔兩が前節に論じたとき罔兩紋の姿をもつた精靈とすれば、景の方も今問題の井紋の形をもつた神と想像することは魅力あることである（井と景は同意）。さうとすると半影の精靈たる罔兩と、影の精靈たる景と井が親縁性のある形態を持つてゐることになるのである。井紋が戰國時代に龍のやうな胴や足、羽根をつけた形で残在してゐることは前記のごとくである。『莊子』に出て來る景と罔兩が、ここに私の命名した殷、西周時代の「井」、「罔兩」の後裔であつたかどうかを確定するにはもう少し傍證がほしい所であるが、少くともこの考へが有力な作業假説であるといふことは許されよう。

## 九、目 申 紋

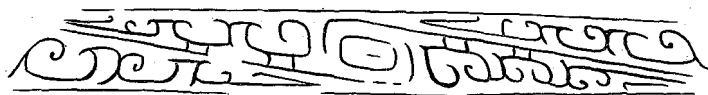
第七節には目を中心とした頭部ともいふべき部分があり、その左右に對稱形に羽根の附いてゐる紋様を扱つた。ここに記すのはこれと構成は近いが、中心となる目の周圍には頭といへるやうな部分は形成されず、目と兩側に配された羽根が並列してゐるとき類である。

圖一二、1は鄭州白家莊第三號墓出土の觚の足の紋様である。殷中期のものであることはいふまでもない。2は安陽侯家莊

圖12 目申紋および關係文字資料



1



2



3



4



5



6



7



8



13



11



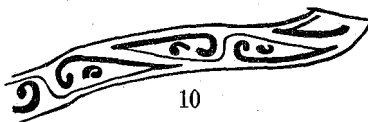
9



14



12



10

殷中期に由來する鬼神



一〇〇三號墓出土の方形の樞石の面を取った部分に表はされた紋様。これで一面は完結してゐる。この下にある樞石の側面には殷中期の面影を残した饗簋が彫られてゐる。中央の目を鉤狀の線で引掛けて左上及び右下の方向に羽根が出、それによつて斜めに限られた空地は、別の羽根によつて埋められてゐる。製圖の便宜上1では白い部分が凹部を表はし、2の方では黒線が刻線を表はしてゐるのであるが、1の白線と2の黒線を比べてみれば、1と2が同系の紋様であることが知られよう。圖一二、3は濬縣辛村第六〇號墓出土の卣の足の紋様。西周前期のものである。目を中心として左上及び右下に向ふ羽根で構成される細長い平行四邊形の紋様單位は、隣接する單位紋様と羽根の部分で重ね合はされてくり返されてゆく。このやうに重ね合せて用ゐる方式は殷時代から使はれ、例へば前引圖一二、2と同じ侯家莊一〇〇三號墓出土の石磬にその例が見られる。<sup>25</sup>圖一二、4は西周前期末ごろの盤の足の紋様。2と同様、圖示した部分で完結する方式である。5は西周中期の瓠壺の足につけられた例。6は永壽出土の西周後期の孟の足に飾られた例である。西周後期以後、この紋様の使はれた例は知られない。

一方、西周中期以降この紋様から目を取り除いた形の紋様が現れ、この方は長く春秋後期まで存続する。圖一二、7はド・ヤング記念博物館藏の西周中期と思はれる盨の足の紋様。8は春秋前期頃の甫人盨の器の口縁の紋様である。9、10は輝縣山彪鎮出土の鼎の腹及び耳の紋様である。春秋後期乃至戰國初頃のものと思われる。9は7、8と同様な方式であるが、同じ器物の紋様でも10の方は紋様を構成する三角形の羽根が一つ一つ獨立してをらず、基部で一つに繋がつてS字形になつてゐることは興味深い。<sup>26</sup>即ちこの節で問題にしてゐる紋様は、目がある場合、目を中心に、これに基部を向けた羽根が左右一對でコンビになつてゐたことは先に説明したごとくであるが、7—9のごとき紋様でも、重なり合つた羽根同志が上下にではなく、基部を向ひ合せた羽根同志が左右に一組と意識されてゐたことがこれによつて知られるのである。

さて、この節は表題に目申紋とした。目は別に説明を要しまゐ。申とは羽根を二ひら、基部でつなぎ合せた形が甲骨文の申字で、これがこの紋様の構成要素となつてゐる所からさう呼んだのである。即ち、甲骨文の申字は多く圖一二、11、12のごとく作られる。この字の上半分に注目すると圖一二、14形をなしてゐる。これを見て直ちに思ひ起されるのは殷中期—後期の羽

根の先の幅廣い部分の表現である。ここに引いた圖のうち、言葉で指示し易いものをさがせば、例へば圖六、10の小龍の尾の先に彫り込まれた線的表現の羽根の先端部のごときものである。他にも、少し注意深く觀察すれば讀者自身いくらでも探し出すことが出来るであらう。圖一二、14の形はそのまま甲骨文の「亡」の字である。羽根の先端部に對する名稱が「亡」であつたことが知られる。<sup>(7)</sup>羽根のこの部分に對し、中國古典中どのやうな字が用ゐられてゐたかは知らないが、穗の先を芒といふ。羽根の先に對して「亡」といふ名稱があつたことは大いにあり得ることと考へられる。それは兎も角、この羽根の先端部の象形字「亡」の基部を一つなかりにし、S字形にまとめたのが「申」字である。

申字が羽根を二つ基部で繋いだものであることは、申字の別の體によつても確かめることができる。即ち、甲骨文申字には鉤狀の短い線の向きが、前引のものと反對になつた類がある。圖一二、13のごときものである。この體は圖一〇、4を參照すると直ちにその成り立ちが理解できる。即ち、この圖像の目の左右に附いた羽根をみると、夫々の中央近くに上下に短い鉤狀のものが出てゐる。この鉤狀の部分の間で二つに切つてみると、どこにでもさらにある羽根がその構成要素であることが知られよう。4は白陶の紋様であるが、圖一〇、3は青銅器の紋様である。いづれも殷後期、レールのIV式に該當する。この圖一〇、3の目の兩側に着くのも、4と同様な構成の羽根であるが、4で中央の鉤狀の部分の中間にあつた、ちよつとした折れ曲りが消失してゐる點に小異がある。さて、この3の圖像の左右にある羽根を線的に表はしたのが、とりもなほさず圖一二、13の體の「申」字なのである。<sup>(8)</sup>

以上で「申」字が羽根を一對基部で結び合せた形の象形字であることが知られたが、その本義は何であらうか。郭沫若は西周、春秋の金文で申字が神の意味に使はれることに注意してゐる。<sup>(9)</sup>筆者はさきに先秦時代神を降すのに旛、旄その他、鳥の羽根をつけた小道具が用ゐられたことに注意した。この申(神)が羽根を以て象られてゐるのもこの關聯において解釋すべきであらう。神を降するための羽根で作つた器物を以て、それに降る神を象つたのではないかと。この點についてはまた別の證據を獲て改めて論じたい。

圖一〇、3、4は目を中心とした一種の頭部ともいふべきものに「申」のついた形、といふことになった。さう思つてみると、圖一〇、2、5—7などは、頭の兩側の羽根を合せると一つの「申」になる形で、「申」と頭部の組合せを3、4とは少し異なつた形で表現したものと見ることができるのである。同様な見方をすれば、この節で扱つた紋様は、目と、その兩側に分れた部分を一つに合せると「申」となる羽根の合成といふことになる。ただこの場合、「申」と目の結合は有機的なものでなく、*nebeneinander* である。即ち「申」を形成する羽根は目と隣接してゐるだけで、これらが結合して一つの動物の身體を形成してゐない點、さきの罔兩と大きな相違がある。このやうなゆるい結びつきであつたため、西周中期以後この紋様から目が脱落したりしてゐる。この紋様を目申紋と呼んだのはかういふわけである。目のないものは重申紋と呼んでおかう。

## 一〇、目 于 紋

圖一三、1は泉屋博古館藏の殷中期の尊の腹の上部につけられた紋様である。一見同じ器の肩に附けられた原龍身鳥首神紋(圖一、2)とよく似てゐる。即ち目の前後に小さい鉤狀のものが出、それに羽根がついてゐる點が共通してゐる。然しよく見ると、圖二、2にある鳥の頸に當る部分が圖一三、1にはなく、後者は目の上下、前後が對稱形になつてゐるなど、兩者は全然別のものであることが知られる。

圖一三、2は臺北故宮博物院藏の殷後期、レールのIV式の甌の肩の紋様である。1と同様な、目の前後に鉤狀のもののついた單位が、廣い間隔を取つて配され、間は羽根を組合せた紋様で埋められてゐる。3は西周中期頃の盃の頸の紋様である。目の前後に鉤狀のものの附いた單位の間に、羽根を組合せた單位が入られてゐる。この例では目の上下にも圖一〇、3、4にみるごとき短い突起が出、下部は上下の頸を具へた口のやうな形をとり、目のある所が頭部のやうな様相をもつてゐる。

目を具へた紋様單位の間を埋める羽根紋様は、これらの例でそれぞれに異なるごとくであるが、よく見れば共通性が認めら

れる。即ち、圖一三、3では圖一三、10の形で、2では圖一三、11の單位を組み合せたもので横長のスペースを埋めてゐるのであり、これらの構成單位は圖にみるごとく基本型を全く同じくするものである。更によくみるとこれらの形は、直中で二つに切つた形、圖一三、12が最小の構成要素をなしてゐるのである。この基本單位は羽根をT字形に構成したものである。その點、圖一三、1で目の前後に着いてゐる羽根も同じ構成になつてゐる。さうすると、圖一三、1—3に引いた紋様は、短い鉤狀のものが左右に附いた目と、平行四邊形にまとめられた圖一三、12の基本單位から成り立つてゐる所に共通性が認められる。12は後述のごとく「于」字に象られる所の圖像である。さうするとこれらの紋様は目と「于」から成る、といへる。目于紋と呼んだ所以である。

なほ、2、3の圖で目の間を埋めてゐた「于」紋は、稀には目なしに純粹にそれだけで使はれることもある。圖一三、4がそれである。ド・ヤング記念博物館藏の鬲鼎の頸の紋様で、殷後期のものである。これが2、3に使はれるものと同様な羽根の組合せであることは少々わかり難い。一番右の單位は、矢印をした所で切り難して見せてある。かうしてみれば容易にこれが「于」紋の一種であることが知られるであらう。

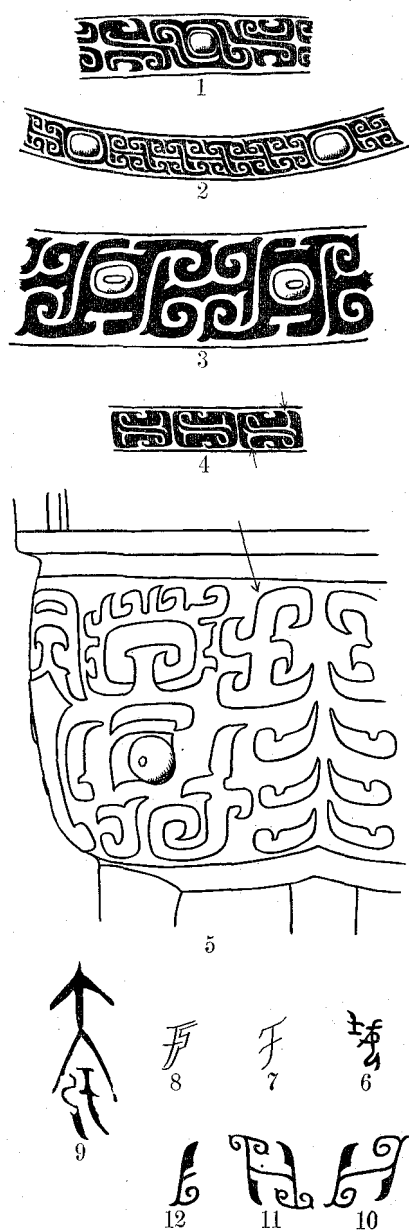


圖13 目于紋および關係文字資料

さて、先の目于紋を構成する単位、圖一三、10、11の半分、圖一三、12の形は、西周前期の青銅器の饗養紋の脇によく見掛ける。圖一三、5に矢印で指したときのもので、これは泉屋博古館藏、西周前期の匱侯旨鼎から採った。この例は縦の羽根の軸から出る小枝は兩側にあつて、いはば「土」字狀をなすが、小枝が一方だけについて「上」字狀になり、さきの「于」紋の構成単位、圖一三、12と全く同じものもよくある。<sup>(81)</sup> 5の「土」字形は獨立した形で圖象記號として用ゐられることがある。圖一三、6に引いたものがそれで、この場合「女」と組み合わせられ、この圖象記號の氏族から嫁に來た女、といふ意味に使はれてゐる。<sup>(82)</sup> この圖象記號を上下逆に書いたのが圖一三、7に示した甲骨文「于」字である。5に示したやうな饗養の脇に表はされる今問題の紋樣單位は時に5とは天地逆の方向に表はされることがあるから、<sup>(83)</sup> 于字が5、6にあるのとは上下反對になつてゐても別に不思議はない。于字は甲骨文では通常横劃が略々直線狀に書かれるが、<sup>(84)</sup> 7に引いたものは器物の象形字などで寫生に近い形を残した字體の多く使はれてゐる王族卜辭から引いたもので、横劃の端が折れ曲つてゐるのも偶然でなく、5のごとき羽根の紋樣の原形を残したものと考へられる。甲骨文「于」字にはまた8のやうな繁體が使はれる。「于」の横に加はつた屈曲した線は何であらうか。9の圖象記號の「大」字形の下にあるのはこの繁形の「于」字形であるが、これで見るとこの屈曲した線の下端は羽根の形になつてゐる。さうすると8の繁體の于は「于」字形の羽根に、もう一ひらの羽根が追加された形なのである。<sup>(85)</sup> ただし現在知られる殷周の遺物には、この通りの形に羽根を組合せた紋樣は知られてゐない。

## 一一、飛

## 紋

殷中期の青銅器には圖一四、1—3のごとき、一見饗養から目を除去したやうな印象を與へる紋樣がある。1、2は輝縣琉璃閣第一四八號墓出土の爵から、3は鄭州白家莊第三號墓出土の爵から夫々採つたものである。この紋樣は圖一四、1の、爵の鑿によつて兩分されたのを見ると知られるやうに、羽根を二枚組合はせた單位を左右對稱形にまとめ上げたものである。2

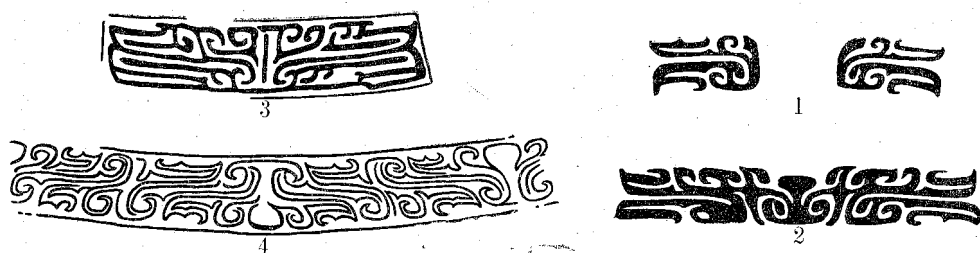


圖14 飛 紋

では目のない饗餮面のごときものに左右からこの單位が附加されてゐるが、圖一四、3のごとく必ずしもこのやうに中央の一單位が分難できる形になつてゐないものが多い。4は1、2と同様鄭州白家莊第3號墓から出た鼎の頸の紋様であるが、2、3のやうな紋様單位を、一部重ね合せて上向下向交互に並べたものである。この紋様によつて、この單位が目のない饗餮といふやうなものでないことが知られる。饗餮のやうなものを上下逆さに使ふといふことはないからである。この式の紋様に當るものは殷後期以後には見當らない。

この紋様を飛紋と名づけたのは次のやうなわけである。即ち、さきに筆者が記したごとく、<sup>(86)</sup>金文の「非」の字は羽根を逆さにして背中合せに一組みにした形で、非と飛は同意であるから一對の羽根で飛ぶといふ觀念を表はしたものと考へられる。この場合、羽根はただ一枚の羽根でなく、一枚の翼をこれで代表させたと見るべきであらう。今問題の紋様は二枚の羽根を組合はせた單位を、羽根の先端を外側にして左右對稱にまとめ上げたもので、「非」字と共通な構成要素、構成原理によつて成り立つてゐる。そこでこれを「非」紋と呼んだらよいわけであるが、非紋では字面が頗る不都合である。そこで同者同義のもう一つの文字を使ひ、「飛」紋と名づけたのである。

## 一二、所謂饗餮紋

殷中期の青銅容器や土器には、大きな目を持つた顔のある鬼神、殷後期の饗餮の原形と思はれる紋様をつけたものが多い。殷後期以後の饗餮の資料は數も夥しく、また變化に富み、この小論の一節の中に論じつくすことは到底できない。ここには殷中期のもの例をあげてその特徴を解説し、

その正體について推測を加へるに留め、殷中期以降の圖像の變遷、消長については別の機會に論ずることとしたい。

圖一五、1は鄭州白家莊第二號墓出土の鼎の頸の紋様である。中央に近く二つの大きな目があり、その下に下顎、左右兩側の頸の中間に鼻がみえ、また目の上にはコシマを横にした形の角がある。この角は、鄭州白家莊の同じ墓から出た尊の腹の紋様では大きな鱗をつけた形で表はされてをり、牡羊の角を象つたものと知られる。これが頭である。この頭の左右には左右對稱形に羽根が附いてゐる。この羽根は圖一四、1に示したごとき、「飛」紋の形をとつてゐる。いはば、頭の兩側に「飛」紋を附けたのがこの饗養である。「飛」紋と頭とは、目の兩脇に於て頗る心細い、ほんの一筋の線でつながつてゐるだけである所は、頭と「飛」紋を組合せたもの、といふ右の説明を正當化するものといへよう。

殷中期の饗養のもう一つの型は、圖一五、2に示したごときものである。これは鄭州白家莊の、1の紋様のつけられた鼎と同じ墓から出た罍の腹の紋様。1と同じ頭に羽根が附いてゐる所は共通するが、附き方に相違がある。即ち、頭から左右對稱形に三條づつの羽根が水平方向に生えてゐるのである。羽根はみな頭にしっかりと附いてゐて、1のやうに今にも千切れさうな所はない。3は輝縣琉璃閣一一〇號墓出土の兩鼎の頸の紋様である。紋様は細い凸線で表はされてゐるが、この式も2と同様、羽根が頭部にしっかりと附いてゐる。1と2、3の兩類を通じ、頭の上につく角の形は變化に乏しい。

第二、三、四節において、殷中期の頭乃至目と羽根を組合せた紋様が、殷後期には體や手足を持つた鳳凰とか龍の類に變化することを説明した。同様この殷中期の、頭と羽根とだけから成る圖像が、殷後期には體や手足を持つた饗養に變身するわけである。

殷中期の饗養をみると次のことが注意される。即ち、饗養をも含めた龍の類は、その長い歴史を通じ、殷後期にも、西周中期にも、また春秋末——戰國期にも、身體の各部がばらばらとなり、身體各部が羽根の形に還原される現象を呈する。<sup>(88)</sup>饗養は實は、我の目の前に初めて姿を現はす殷中期において、早くも圖一五、1のごとき、頭と羽根が殆んど分離しかけた形をとる類を含んでゐるのである。圖一五、2、3のごとき類にしても、頭部とその兩側についた羽根とは、頭と胴といったやうな、

有機的なつながりはないのである。その出現の時以後千年以上もの間饕餮乃至龍の圖像において最も原初的な要素として存続した羽根がどういふ象徴的な意味を持つてゐたかは、饕餮の性格を考へる上に重要である。

筆者は以前に龍の圖像を論じた際、その身體各部を構成する羽根が、升天の能力に關聯した神性を象徴すると同時に、この羽根がまた龍の雨を降らす能力と關係してゐることを、甲骨文舞字（羽根を手に持つて舞ふ雨乞ひの舞の象形字）を引いて推測した。龍につけられた羽根が特に雨に關聯を持つてあらうことは、第一〇節で説明した「于」紋に關しても推測を加へることができる。于に雨冠をつけた事は、『説文』に「雩、夏祭、樂于赤帝、以祈甘雨也、从雨于聲、雩、雩或从羽、雩、舞羽也」といふごとく、漢代には羽根を持つて舞ひ、帝に雨乞ひをする祭りと考へられてゐたのである。甲骨文には雩、雩字があり、個有名詞に用ゐられるが、また祭りの名としても使はれ、この祭りは雨乞ひの雩だと考へられてゐる。<sup>(90)</sup> この雩といふ文字は形聲文字――

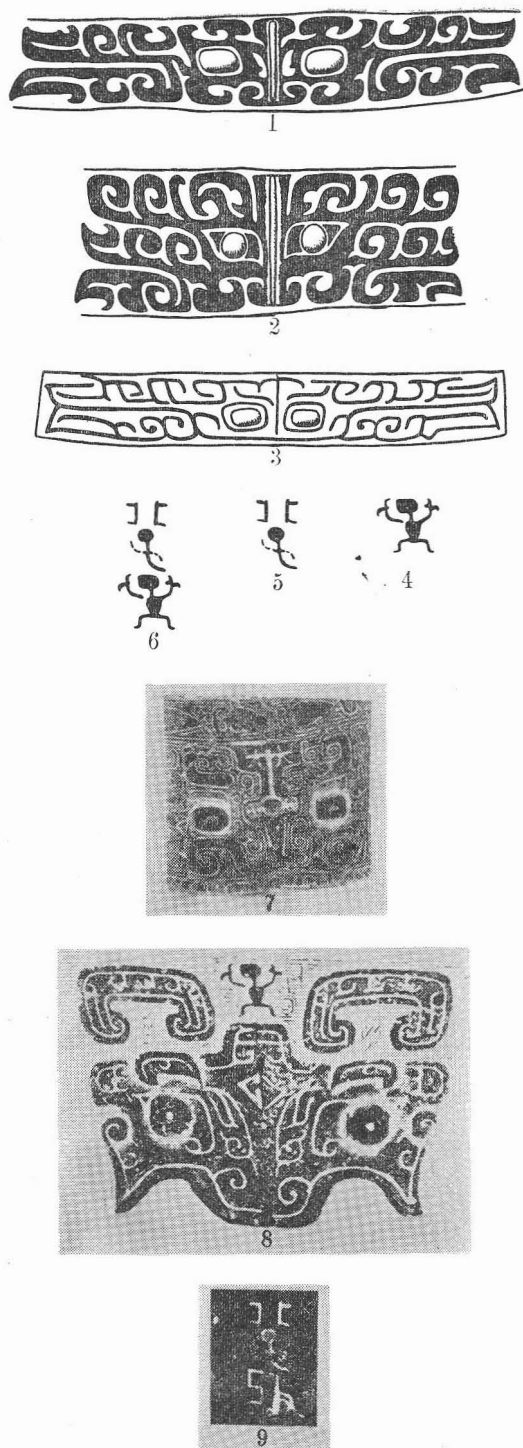


圖15 殷中期饕餮紋，圖象記號を加へた殷後期饕餮紋



雨乞ひの意味だから雨冠をつけ、雨乞ひの祭りは「于」の音の語だから音符として于を附けて作られた字——であらうか。恐らくさうではあるまい。雨乞ひの祭りは手に羽根を持つてする祭りであり、甲骨文𩇛は手に羽根を持つ舞人を象つた字「無」に雨冠をつけた文字で、𩇛の異文と考へられてゐる。<sup>(91)</sup> 𩇛が从ふ于が前記のごとく特定の形に構成した羽根の一種であるとなると、この于はやはり雨乞ひの祭りで舞人が持つて舞ひ、重要な役割を持つた羽根の一種だと考へた方がよさうである。

さうすると、圖一三、5のごとく饗養紋の中でこの于紋がその構成要素をなすものがあり、また「于」が𩇛の舞に使はれる羽根であつたについては、次のやうに解釋することができよう。即ち、「于」形の器物は饗養を構成する身體部分を象つたもので、これが雨乞ひの祭りに際して使はれた——恐らく舞人が手に持つて打ち振るか何かして、雨を降らせる力のある對象に懇願するのに使はれた——のは、この「于」が饗養の持つ降雨の能力に特に關係深い身體部分と考へられたからである、と。

ところで、殷時代に雨を降らせる力がある神格としてよく知られるのは帝である。卜辭に帝が多く現れ、その用法から知られる帝の能力として陳夢家は第一に「令雨」を擧げてゐる。<sup>(92)</sup> 「令雨」の令を陳夢家は命令の令と解釋してゐる。すると、帝は後述の河や岳のごとき、實際に雨を降らせる力をもつた下位の神に、雨を降らせるやうに命令するのだ、といふことにならう。帝が自ら雨を降らせるとすると、卜辭中に何故帝に對して雨乞ひの祭祀が行はれた記録がないのか解釋がつかないからである。一方、卜辭中で舞、𩇛といった雨乞ひの祭祀が行はれ、その結果雨が降ることが期待されてゐるのは、河、岳等若干の地方神に對してである。<sup>(94)</sup> この河については陳夢家も引くごとく卜辭中に「令雨」を占ふものがある。<sup>(96)</sup> 帝の場合と河の場合では同じ「令雨」でも違つたニュアンスで使はれてゐるといふ他なからう。

さて、雨を實際に降らせる力をもつた河、岳等がどのやうな神格であつたかについては研究が進んでゐるのてくはしく記す必要はあるまい。殷王朝の遠い祖先の系圖に組み込まれた祖先神もこれらの所謂自然神と同等な性質のものと考えられてゐるが、これらは特定の地において祭祀された一種の自然神で、穀物の稔りや降雨を左右する力をもつものと考へられ、またこれを祀る特定の人間集團があつて、その人人は神と同じ名前で呼ばれ、またその住む土地も同じ名で呼ばれてゐたのである。<sup>(97)</sup> 更

にその人間集團はこの神名、族名、地名を示す文字と同じ記號を旗じるしとして持つてゐたことが知られてゐる。<sup>(98)</sup>

さて、先の圖像の研究によつて雨を降らせる能力がある神格と推論された饗養は、かう考へて來れば、卜辭によつて祈雨の對象であつたことが知られる所の、この自然神の圖像であると考へる他ないことになるのである。いつも青銅器の主要な部分に大きく扱はれ、壓倒的な迫力を以て表現されてゐるこの饗養は、雨を降らせ、穀物の稔りをもたらし力を持つと信ぜられた、この自然神の一つと考へることによつて始めて十分に理解することができよう。饗養が、卜辭中に出て來て祈雨、祈年の對象となつてゐる神格の圖像であることについては、右に記した推論以外に、遺物の直接的な證據が若干ある。即ち、青銅器に表はされた饗養中には、その圖像に圖象記號を書き込んだものがあつて、これはその饗養がその圖象記號によつて表はされた族の神であることを示すとしか考へられないのである。

圖一五、7に示したのは殷後期の觚の足の紋様で、牛角狀の角を持つた饗養の額に「車」の圖象記號が鑄込まれてゐる。觚の銘文は通常足の裏側に鑄つけられてゐるものである。わざわざ表側の、しかも饗養の額の眞中に表はしたといふのは、この饗養が「車」族<sup>(99)</sup>「車」地の神であつたからのことだとしか考へられない。饗養といふやうな威力のある鬼神の額を、これと無關係な者共の名を以てけがすといふやうなことは、到底ありさうにないことだからである。

圖一五、8はサックラー氏蒐集の殷後期の鬲鼎につけられた饗養で、これはまた額の眞上に圖一五、4形の圖象記號がつけられてゐる。この鼎は別に器内に圖一五、9のやうな銘文がある。この器内の銘の中の圖一五、5形と、器外の4形を合せると、圖一五、6のごとき、所謂「析子孫形」の圖象記號になるのである。この場合器内の銘の5形は「某子」の形の圖象記號で、非の地に移り住んだ殷の子姓の一族を表はすものである。<sup>(100)</sup>またそれに4形が加はつた6の形は「子某某」の形式の圖象記號で、この形式については先に筆者が考證したごとく、4形は、5形の圖象記號を持つた一族が新たに住むことになつた土地の名と解釋する他ないのである。<sup>(100)</sup>通常は器の内壁に記す銘文の中から、何故4形だけを分離して器外の饗養の上に記したのか。これは4形の記號がこの饗養に屬するものであつたからに違ひない。即ち、この饗養が4形の記號を名とした地の神である4

形の名の神であつたからこそ、その額の上にこの記號を表はしたのである。このC字形の角をもつた饗養は最もよく見掛けるものである。また所謂析子孫形、圖一五、6の圖象記號は圖象記號の中でも最も数の多い類であるが、その總てが眞物であるといふには程遠いにしても、これが殷の子姓の有力な一枝の圖象記號であればこそかく多數残つてゐるのだ、といふ程度のことは十分言ひうることである。至極當然のことであるが、この子姓の一族の住地に住む神であつたればこそ、またこのC字形の角をもつた饗養が多くの器物に表はされて残つてゐるのだ、といふことになるのである。

右のほか、安陽侯家莊一〇〇四號墓から發掘された牛頭方鼎、鹿頭方鼎も今問題の二類に入るのではないかと思はれる。即ち、牛頭方鼎には水牛の頭を、鹿頭方鼎には鹿の頭を鼎の側壁中央に大きく、饗養と同様に大きく鑄出してゐるのであるが、兩鼎は夫々「牛」と「鹿」の銘文をつけてゐると記される。<sup>(103)</sup>この銘の拓本は未發表であるが、松丸道雄氏の實見された所によると、器の内底に夫々水牛及び鹿の側視形の圖象記號が表はされてゐる。即ち「水牛」の圖象記號を持つた一族——「水牛」を族神とした人達——が水牛頭を飾つた鼎を作り、同様「鹿」の圖象記號を持つた一族が鹿頭を飾つた鼎を作つたわけである。即ちこれもその器物に飾られた主要な圖象が作器者の一族の祭る神だといふ證據のある數少い例に入るのである。

他に盤や戈などには鬼神の像に圖象記號が書きこまれた例が幾つかあるが、<sup>(104)</sup>これらは他に適當なスペースがないためにさうしたのであり、そこに表はされた鬼神の名が即ちそこに書かれた銘文の名である、といふ證據も特にないので引かない。

殷後期の饗養の種類は多く、そのうちどれがどの族の神かといふやうなことは現在のところなかなか知りえないとはいへ、饗養といふものは殷時代にそれを祭るべき特定の族を持つた自然神＝遠祖神の姿であつたことは、以上の論考によつて略々明かになつたと考へる。

所謂饗養が殷時代の族祖神の姿であることがわかれば、第三節に論じた饗養の脇に配された鳳凰の性格についてもかなり高い蓋然性を以て推論を加へることが出来る。

特定の地の自然神ニ氏族の遠祖神が、殷時代に帝に命ぜられて雨を降らせたり、豊穰をもたらしたりすることが出来る神で、地位からいつて帝の下に位することは右に論じた所から明かである。帝と氏族の遠祖神の關係については、某帝の子孫より某の姓が出た、といふ形で後世の文獻に残つてゐる。殷時代においても、各族の祖先神は帝と血縁的な出自關係が想定されてゐたと推定される。即ち、饕餮の形で表はされた神は、帝の後裔とみなされてゐたと考へられるのである。

ところで帝と鳳凰といふと直ちに思ひ出されるのは、殷時代の甲骨文に

于帝史鳳、二犬<sup>(106)</sup>

とある例で、これについて郭沫若は

ここに「于帝史鳳」といふのは、蓋し鳳を天帝の使とし、これを祀るに二犬をもつてしたものであらう。『荀子』解惑篇

に『詩』を引き、「有鳳有凰、樂天之心」といふ。蓋し鳳凰が帝之左右にあることを言ふものであらう。今この片を得て、

鳳凰の傳説が殷代以來あることを知ることが出来る

といふ。卜辭中に鳳字はこの例以外總て風の意味に使はれてゐてこの卜辭は今のところ孤證のきらひがあるが、この辭の帝史鳳は郭氏のやうに「天帝の使の鳳」と解する以外はないと思はれる。郭沫若は引いてゐないが、鳳凰が帝の使ひとしての意味をもつた文獻の證據としては、『山海經』の次の條を引くべきと思はれる。即ち、大荒東經に

大荒之中有山、名曰崑崙嶺<sup>嶺</sup>……有五采之鳥相鄉棄沙<sup>郭注、未聞沙義、鸞行案、沙疑與娑同、鳥羽娑娑也</sup>、惟帝俊下友<sup>郭注、亦未聞也</sup>、帝下兩壇、采鳥是司<sup>郭注、言山下有舜二壇、五采鳥主之</sup>

とあるものである。これは鳳凰とは書いてないが、五采鳥といふからやはりそれに近い類と思はれ、地上にある帝の壇を管理してゐるといふのである。「相ひ郷ふ」といふから一對である。殷時代卜辭の「帝史鳳」の戰國時代における遺存と考へてよいのではなからうか。

さうすると、先に明かにした所と併せて次のことが明かになつた。

(1)、饕餮の姿を以て表はされた神は帝の命令を受ける立場にある神で恐らくその帝の後裔とされるものである。

(2)、帝は鳳凰を使者として使ふ。

かうなれば、殷周の青銅器で饕餮の兩側に配された鳳凰は帝の命令を傳達する使者である、といふ以外の結論はあり得まい。その姿は丁度『山海經』に帝の壇に控えてゐると記される一對の五采鳥と同じことである。

中國の疆域外にあるとされる變つた姿や風俗をもつた者の國のこととされ、鬼神そのものではないが、『山海經』には「使四鳥」「使四鳥虎豹熊羆」とあるものが十二例ある。<sup>(107)</sup>その中五例は帝俊の後裔とされる國で、顓頊、禹の後裔乃至これと關係ある國が各一つづつである。これらも、帝の後裔とされる族神が、帝の使の鳳凰に侍かれてゐるとされた、今問題の傳説の退化した形と考へて先づ誤りなからう。饕餮の兩脇に配された鳳凰や龍身鳥首神は、一對であるのが通例であるが、獨立の紋様單位として使はれる圖二、12のごときものは、向ひ合ふのが四羽であることが多く、帶狀の紋様帶に配列された翟<sup>(108)</sup>鳳凰についても同様である。『山海經』に「四鳥」といふのはこのやうな圖像上の事實に對應するものと考へられる。一方、『山海經』中でも同じ玄股國に對し、大荒東經には「使四鳥」とあるのに對し、海外東經では「使兩鳥夾之」といふごとく、四鳥、兩鳥と異説があつたらしい。赫懿行は海外東經のこの句に對し、高誘は『淮南子』墜形訓に注してここを引くが、「使」の字がないと注意してゐる。さうするところは「兩鳥が之を夾む」となるが、これは丁度饕餮を鳳凰が夾むのと同じ形である。この形式の圖像が春秋末まで残つてゐたことは圖四、10に引いた所から明かである。<sup>(109)</sup>「兩鳥が夾む」といふのはこのやうな圖像に關する記述と考へられる。

### 一三、複合羽紋

圖一六、1は羽根をかなり自由な形に組み合せた紋様で、鄭州白家莊第三號墓出土の殷中期學の頸の紋様である。特定の鬼

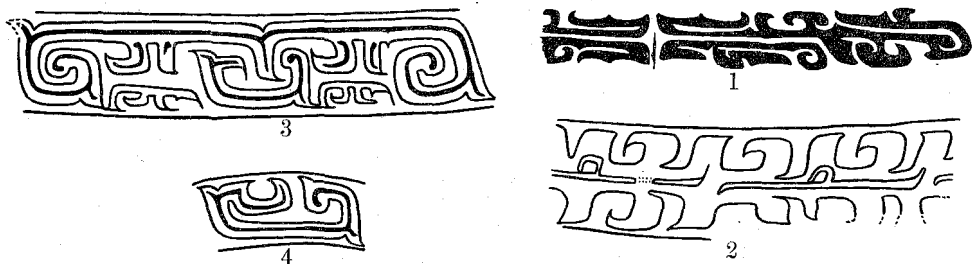


圖16 複合羽紋

神とか象徴的な圖柄であるかどうか判断がつかない。2は殷後期の甗の足の紋様である。上と同系統のものと考へられる。3は西周中期にかかると思はれる簋の頸の紋様であるが、これも1と同様羽根を自由な形に組合せた圖柄の西周中期風な表現である。4は西周後期の盥の蓋の縁にくり返される紋様の一單位をとり出したもの。3のやうな紋様の行きついた所とみてここに引いた。他に殷中期の紋様で羽根に關係あるものとして四紋があるが、これについては別にとり上げてくはしく論じたことがあるのでここには觸れない。

#### 一四、結

び

殷中期の青銅器、土器等を飾る紋様で、羽根が重要な構成要素となつた類は、ちよつと見渡した所では非常に種類に乏しいものといふ印象を受けるが、以上に記したところにより、豫想外に色々なものがあることがわかつたであらう。色々あるとはいつても、勿論殷後期の豊富さに比べてみれば全然問題にならない程度ではある。それにしても、かなりの種類に富むことがわかつたのは、互に非常に近似した形をとり、迷路のやうな羽根の集合の中に大きな目だけがきは立つてゐるやうな殷中期の紋様の一つ一つについて、もう少しわかり易い殷後期のものの中から對應するものを探し出し、中期から後期への發展を系統づけてみて始めて知られたことである。殷中期のここで取扱つた類の紋様は、殷後期のもの以上に羽根にすつかり埋没してをり、後に龍の類に變化するものも動物らしい特徴を殆んど具へてゐない。第二―六節に記したやうな龍、鳳のごとき神話的存在をみればすぐに氣付かれることである。もつともこれらと並んでこの論文では取扱

はなかつた虎や龜など、自然にゐる動物を寫した類も少數ながら殷中期にあることはある。

この論文で取扱つた類の鬼神は、饕餮を除き、殷中期には目と羽根の結合せの方式の相違によつてのみ區別される、幾何學的ともいふべき抽象的な姿を持つてゐたわけである。このやうな表現様式について、殷後期に見られるやうな、動物らしい様相をもつと多く具備した姿のものと考へられてゐた鬼神が、殷中期の特殊な表現様式に翻譯されてそのやうな抽象的な形に表はされてゐるのだと考へることが出来るであらうか。これは無理である。第二節に記した龍身鳥首神についてみると、これは先に説明したやうに殷中期には鳥の頸から上の圖像だつたのである。これに附いた羽根が殷後期になると手や、或ひは胴體の形に變形され、龍身鳥首神の形が生れてゐるのである。即ち、殷中期から後期へと、表現様式だけが變つたのでなく、表はされる鬼神の變身が行はれてゐるのである。他の圖像についても、殷中期に本來身體部分でも何でもなかつた部分が後期に口となり、角となる、といふやうな變身が起つてゐるのである。

さうすると、殷後期に姿を現す、多少とも「動物紋」と呼ぶにふさはしいやうな身體各部の區別できる姿の鬼神は、殷中期には別な形でしか存在せず、見る通りの、羽根を主要な構成要素とした抽象的なものでしかなかつたと考へねばなるまい。この判斷に誤りないとする、鬼神の圖像は殷後期から殷中期へと時代を遡るにつれ、その圖像中における動物らしい要素が稀薄となり、各種に組合はされた羽根の占める割合が壓倒的に多くなる、といふことができる。更に龍山文化まで遡るとどういふことになつてゐるであらうか。龍山文化の土器に、確かに殷のものとの祖先と思はれる羽根の紋様が使はれてゐることはこの論文の最初に記した通りである。その他、龍山文化に鴨の嘴狀の鼎足の上部に一對の目と解釋できる小圓を飾る例が多いことは改めていふまでもあるまい。すると、現在の不十分な材料で判斷する限り、殷時代になると色色な形式に組合はされ、個別的な鬼神として様様な形象を形成することになる羽根と目玉は、龍山文化の時代には未だ夫々獨立な形で何等かの象徴的意味を荷ふに留つたと考へられる。

ここに言つてゐるのは羽根と目とから成り立つた鬼神の圖像の傳統に關してのことで、周知のごとく仰韶文化以來龍山文化

にも、少數つつながら殷にも引きつがれてゆく自然に居る動物の圖像——何等かの象徴的な意味を持ったと考へられる——の存在が知られてゐる。第二節で記したごとく、龍身鳥首神紋のもととなつた殷中期の鳥の首の表現は、仰韶文化の土器の彩紋に現れる鳥の首の表現の傳統を引いたもののごとくであるが、さうとすると、これは仰韶文化以來の、象徴的な意味を持ったと思はれる具象的な動物の表現と、龍山文化までは確かにたどることが出来る羽根、目玉といった象徴的表現の融合とみることもができるのではなからうか。この論文に記したやうな羽根と目を主要な構成要素とする各種の鬼神の中には、殷中期になつても自然にゐる動物の姿とは凡そ關係のない形に留るものがある一方、例へば饕餮などのごとく、一見してさうと知られる野生羊の角を殷中期から頭につけ、殷後期になると虎の耳や牙や爪、水牛の角や目等、具象的な動物の身體部分を具へることによつて種類が俄かに豊富になつて來るものがある。これも殷中期に根ざした動物の具象的表現と、羽根と目のいはば抽象的な表現との融合過程の、殷後期における急速な進展と解釋することが出来る。鬼神の圖像は身體部分の表現において豊富になるにつれ、その象徴する内容——屬性——においても規定の豊富なものになつていつたことは當然のこととして推測される。

ここに急速な進展の認められる二つの表現の傳統の融合は、同時に進行したことの知られる殷王朝の勢力の伸張、征服と平行して起つたことである。この鬼神の表現に起つた現象を、征服者と被征服者の相異つた美術的、宗教的表現の傳統の混合、融合によつて推進された發展といふ方向から解釋することは恐らく正しいであらう。一昔前であれば、人はこれを仰韶と龍山、華夏民族と東方民族といふ對立を以て説明したことであらう。然し現在では龍山文化は仰韶文化から發生したものであることが知られ、仰韶文化にも龍山文化にも幾つかの地方文化があり、相互に歴史的關係をもつことが知られてゐて、問題は單純でない。かういつた點に關して更に一段立ち入つた推測を加へるのは、もう少し別の材料によつて研究を進めてからのことにすべきであらう。

以上に述べたのは殷中期から後期にかけて起つた變化の面に焦點を合せた考察であるが、不變な部面にも注意しておく必要がある。即ち、殷中期の遺物に現れる紋様の種類は大して多くないとはいへ、その青銅器等における使用法の原則には後期と



の相違が認められないのである。つまり一つの器乃至同一人の墓から出る複数の器には、各種の紋様が認められるといふ點である。殷周青銅器の資料を常に扱つてゐる者にとつては、これは何の問題もないことのやうに考へられてゐるが、これは反省の必要がある。仰韶文化に遡れば、半坡遺蹟から出る彩紋土器に出て来る動物紋は魚乃至魚を伴つた人頭ばかりであり、その幾何學紋的な紋様も魚紋から由來すると考へられ、<sup>(113)</sup> 廟底溝から出土する彩陶に現れる動物は鳥で、同地の彩紋土器の曲線紋も鳥紋からの變化と解釋され、<sup>(114)</sup> このことから半坡型仰韶文化は魚をトーテムとする氏族で、廟底溝型仰韶文化は鳥をトーテムとする氏族のものだ、と解釋する<sup>(115)</sup> ことが可能な現象が注意されてゐるのである。殷周青銅器に飾られてゐる所謂動物紋が單なる裝飾ではなく、古典に「鬼神」と呼ばれたものであることは先に筆者が證した所であり、<sup>(116)</sup> これらが一定の地に住むと信ぜられ、一定の氏族の祭祀する自然神＝遠祖神であることも度度記した通りである。即ち殷周青銅器の動物紋と、仰韶文化の動物紋は異質なものでなく、歴史的なつながりを豫想すべきものである。さうすると、これらの鬼神を複數で青銅器につけてゐるといふことは、殷時代には仰韶時代の一つの氏族に固有な神乃至トーテムといふ段階はとうに過去のものとなり、個個の鬼神は夫々の鎮座する地にある國國において、その地の氏族によつて祭祀を受けてゐるとはいへ、殷の氏族たるものすべてがその加護を期待してよい、殷の鬼神にされてゐたことを示すと考へられるのである。

殷後期の卜辭資料によつて伊藤道治は<sup>(117)</sup>

土をはじめ、自然神には、本來、それぞれ固有の祭祀する國族があり、それらの族にとつては最高神であつたと考えられる。殷の征服下にはいると、その神は、殷の最高神よりは、いちおう低次の神として、殷王朝の祭祀を受けるようになつた。しかもこのことによつて殷と被征服者との紐帶が作られたのである……

といつてゐる。殷後期の青銅器などに飾られた多種類の鬼神の圖像は、ここにいはれる殷王朝の祭祀を受けた國國の鬼神と考へられるのである。然らば、殷中期の青銅器に、後期ほど多種多様ではないにしても、多種の鬼神像が飾られてゐるからには、この青銅器の作られた時代に、その作者による征服乃至統一の過程が、殷後期と近似した形態を以て進行してゐたことを推論

することができる。

盤庚遷殷以前の殷の歴史については、考古學的遺蹟、遺物が知られ、また王名、首都名、傳説的な歴史などが、傳説的な歴史書や卜辭によつて知られてゐる。この度の殷中期の青銅器その他の遺物に現れる紋様の研究によつて、これらの資料では明かにし得なかつた盤庚遷殷以前の殷の文化に起つてゐた變貌の相、社會政治情勢の一端などが新たに推測されるに至つたのである。

末尾であるが、樋口隆康氏に對しては自ら撮影された多數の殷周青銅器紋様の細部の寫眞を挿圖に際して利用することと許されたことに對し、出光美術館の杉村勇造氏に對しては同館新收の簋の紋様拓本採取の便宜をお計りいただいたことに對し、ニューヨークのサックラー氏に對しては蒐集の兩鼎の銘の掲載を許可されたことに對し、感謝の意を表したい。

#### 註

(1) 容庚一九四一、九九一五六、小杉一九五四、Karlgren 1951, Consten 1957-9. 筆者の今記した心得を守つた點で成功した論文として Weber 1968 があげられる。

(2) 林一九六〇、四七

(3) 林一九五二、同一九五三、同一九六〇、同一九六四、同一九六六 a

(4) 一九五三年以降の鄭州の二里岡、人民公園の殷代遺蹟の發掘調査の結果、地層の上下相疊關係によつて殷王朝の安陽遷都以前にあたる殷中期文化が知られ、その存在が學界によつて公認されてゐることは改めて説明するまでもない(林一九五八、一六二二)。

然し、學者の中には少數ながらこれを認めない者がある。この機會にその説を紹介し、誤りを指摘しておく。

李濟はかういふ(李、萬一九六六、序、三)、「鄭州商代の遺物が安陽商代の遺物より早いと認める理論的根據は『鄭州の商代遺蹟は安陽殷虛より早い、故に鄭州出土の遺物はまた安陽出土の遺物より早い』といふことである。……このやうな假設はさう簡單ではない。

例へば鄭州市銘功路西側の二基の商代の墓から出た副葬品を見ると、大部分の青銅器は小屯丙區の殷墓に見られるばかりでなく、その他の玉、石、骨製品の若干もまた小屯の墓に常見のものである」と。

このやうな「假設」は李濟が想像したものに過ぎない。周知のとく鄭州二里岡、人民公園その他の地域の層位の觀察によつて、鄭州の殷文化層の中に、安陽の殷後期よりも時代が古い段階の文化があると判定されたのだからである。李濟が臺灣にゐる革命後の大陸の考古學關係出版物に目を通す機會に恵まれなかつたのが、この不幸な誤解の主たる原因であると思はれる。

李濟は殷中期式の平底爵が殷後期のものに先立つものであることを認め損つたため、前引書において爵の形式の變遷に關して様様な無理をせねばならなかつた。即ち、平底爵が更に古い時代の陶爵と形式のつながりがあることを認めながらも、青銅爵の内では圓底弦紋爵が最も古く、平底爵は甗形器の影響によつて後に現れて來たものだといふ(前引、一〇六一七)。別の所では平底爵を一種の退化形式だともいつてゐる(同、六三)。紋様についても小屯丙區、三

三三號墓から出た平底爵の殷中期式紋様（筆者當論文の于紋）も退化形式といふのであるが（同、六三一四、一〇三）、その退化の過程を示す圖（同、挿圖三六）で、「退化」した紋様が由つて來つたとされるものと動物紋も、實は同じ殷中期の遺物から採られてゐる。その圖が、學術的發掘ではつきり時期の知られる資料から採られず、出土データ不明の博物館のコレクションから採られてゐるのは、またどういふわけであらうか。

李濟が小屯丙區出土の殷中期式の爵が後起のものであると考へたのについては、丙基址が乙基址などより年代が降るといふ判斷に基づく所があるわけであるが（同、六五一六）、この丙基址の年代については大いに問題があるのである。即ち、丙基址は、そこから出た甲骨の文字によつて、甲骨の分期でいふ第四期よりも遡り得ないとされてゐる（石一九五九、三三二六）。所が丙基址から出た甲骨として表示せられる番號（同、三三二二三）を小屯、殷虛文字乙編で當つてみると、この表には第四期と記されてゐるとはいへ、實は典型的な第四期でなく、その期の歸屬については貝塚茂樹、伊藤道治らと、董作賓などの中國研究者の間に意見の相違がある問題の一群（貝塚、伊藤一九五三、六二一七一）であつて、これが第四期であるとの判斷をもとにして論を進めるには大いに慎重でなければならぬ代物なのである。丙基址關係の甲骨を通覽すると、これらは典型的な五期の中に入らない特殊な字體の中でも、多子族、王族とはまた別の、一種のアーカイックな字體のもので例外がない。その特徴としては、第一期以降の典型的な五期のどれにもない、曲線的な所が目立ち、中に線の太細の變化をつけたものも多い。また品物を象つた文字に、第一期以後のものよりも寫實的な表現が認められる。この特殊な字體の甲骨文字の年代を、祖先の稱謂によつて確認できるかどうかは未だ調べてみてゐない。ただ確かなことは、この字體が典型的な第四期とは全く質異なもので、到底同時期ではあり得ないことである。

この字體の時代についてはかう考へられよう。即ち、典型的な第一期以後の字體と比較すると、より曲線的で、象形字が象つた對象の丁寧な寫生に近い。といふことは、考古學の型式學を適用すると、型式上第一期よりも古式である、といふことである。實年代も第一期武丁時代より遡るのではなからうかと考へられる。それについては同地區出土の遺物が參考になる。即ち、丙基址と關聯した墓から出土した青銅器のうち、例へば爵をとりあげてみれば（李、萬一九六六、圖版二七—二四）、平底乃至半平底で殷中期の特徴を存したものが多く、また殷中期式紋様を圓底爵につけたものや弦紋圓底のものも混つてゐるなど、殷中期から後期への過渡的な性格を帯びてゐると言へる。然らば石璋如によつて丙基址と關聯するものとして引用された一群の甲骨は、全體として字體の型式上統一ある一群を形成してゐるのであるから、この基址と關聯した墓から出た器物の年代を、この一群の甲骨にあてはめることは大體の議論としては妥當であると考えられるのである。

さて、李濟はまた、平底爵が早期のものでない證據として、甲骨の爵の象形字を引用してゐる（李、萬一九六六、六四）。圓底でなく、平底の爵を象つた甲骨文字は、董作賓の斷代標準でいふと第四期のものに現れるから、平底爵は早期のものではない、といふのである。ところでここに第四期とされてゐるものは、總て貝塚、伊藤兩氏の王族、多子族のものか、右に問題にした古風な體の一群である（同、挿圖二八）。不幸なことにこの論點においても李濟は董作賓の説に誤られてゐるのである。

李濟の誤りは、同氏が中國本土の殷代研究の進展についての情報に不十分にしか接し得なかつた點において、また臺灣の甲骨學者の甲骨の分期に關する不正確な説に誤られたといふ點において、恕すべき點がないこともない。一方、同じく鄭州の殷中期文化が古いことを認めない立場をとる者でも梅原末治の考へに至つては論外である。梅原は一九六一年に「殷中期」とされてゐる鄭州出土古銅器の性

質」梅原一九六一」といふ論文にその考へを述べてゐる。梅原は鄭州の住居址關係遺蹟において、安陽の殷後期文化に先立つ、殷の中でも古い文化層があることは認めてゐるが（同、一一二）、鄭州の墓から出る青銅器がこの古い文化に属することは認めない、といふのである。鄭州白家莊の殷中期墓出土の青銅器について梅原は「是等諸器の形はいづれもが安陽殷墓群から出土した夥しい古銅器に於けると基本の形制を同じくし、「所謂饕餮紋を以て器を飾つてゐるのにも違いはない。ただ異なるのは、作りがすべて薄手で、且つ鑄造が粗であり、引いて一見古拙な趣を呈する點である」（同、三三）とし、その出土した墓の埋葬法や、青銅器以外の遺物も安陽殷墓に見受けるものであることを指摘し（同、五—六他）、「一見古拙な趣を持つたもの、乃至特徴のある古い土器と形態を同じくする類」も「總じては主な罍・爵・觚・尊などそれ／＼殷代の諸器に一般に見るところと同様な、一つの固定した形を具えたものであつて形の上で先行形式と解すべ何物もない」（同、一五）とし、殷虚から出たと傳へられる鉛製の彝器の明器が、今問題の殷中期とされる青銅器と同じ範疇に入るものである所からみて、この一群の青銅器もこれと同様安陽に都のあつた殷後期に作られた明器的なものだといふ（同、二二—二三）のである。

思ふに、鄭州白家莊の墓から出た青銅器については、梅原とは異なり、次のやうに考へるべきである。即ちこの青銅器中には殷中期文化層から出土する土器類と形式が共通するものがあり、簡素な形式の饕餮紋も同文化層の土器に特徴的なものであるから、これは同じ文化段階に属する、と。材料を節約した薄手な作りや簡素な紋様表現が、古拙な段階に属するものか、或ひは發達の頂點から退化した結果生れたものかについては、材料が極めて不十分な研究段階においては時に問題になることもあるが、殷文化の層位的研究、殷代青銅器鑄造技術の研究が進んでゐる現今において判斷を誤るといふのは、餘程の不勉強か、研究者としての能力が始めから缺如して

ゐるか、またはその兩者であるとしか考へることができない。梅原のごとく殷中期と殷後期の青銅器が基本の形制を同じくするか、饕餮紋を以て器を飾ることも同じだ、といふのなら、西周前期も同様だ、といふことにならう。更には殷周の尊彝から形を採つた明時代の容器も同じ時期のものだ、と判斷されかねまい。全く非歴史的な判斷である。

梅原はまた鄭州白家莊出土遺物が何も古いものではないと言はうとして、同様なものが安陽からも出てゐることを強調してゐる。しかしこの論法が成り立つためには、安陽出土の遺物がすべておそい時期のもので、鄭州に發見されるやうな早い段階のものを含まない、といふことが豫め證明されてゐる必要がある。然し、こんなことは何時證明されたであらうか。

梅原は層位的證據としてわづかに次のごときことを引く。即ち、安陽小屯丙區にあり、殷中期式の尊、罍、觚その他の遺物を出した三八八號墓が古い窖を壊してその上に造られ、その「窖内には安陽盛時の硬質陶片が遺存して、古墓としてそれよりも時代の下ることを示すことが調査者によつて確認されたのは特に記さる可きである」と石璋如、高去尋の説といふものを引いてゐるのである。はてさういふこともあつたかと思つて石璋如の「小屯殷代丙組墓址及其有關的現象」（石一九六一）を見ると、この墓の層位關係は、この墓の上層には灰坑があるが、下層には何もないことになつてゐる（同、七九六頁、表六、及挿圖二）。梅原は何に由つたのか不明である。たとへば梅原が記したやうな層序が石璋如によつて書き漏されてゐるとしても、硬陶は周知のごとく鄭州殷中期文化からも出てゐるのであるから、何で直ちにその存在を以てその出土した窖が殷盛期以後といへようか。第一、臺灣に居る殷虚の昔の發掘關係者達が、出土硬陶片をみて、當時それが殷中期か、後期か、それとも西周か年代の判定が出来たはずはなく、現在その陶片を手にとることができたとしても、その判定が出来るとは到底思はれないのである。

梅原が殷中期式青銅器と同じ範疇に入るといふ鉛製の彝器の明器に至つては、一體兩者のどこが似てゐるといふのであらうか。これら鉛製明器は殷後期—西周前期の形式をもち、問題の青銅器とは器形の特徴でも、紋様の點でも全然違つたものである。梅原は兩者とも簡素な作りをもつといふ抽象的な特徴において共通だとも認めたのであらうか。この飛んでもない誤認も、梅原が前引論文に殷中期式の青銅器を以て、殷後期のものを粗末に作つた明器と認定する如き目玉の持主であることを思ひ起せば、少くともこのやうな立言がなされた所以だけは十分に理解することができるのである。

梅原は右論文に殷中期式の青銅器といふものは最近注目浴びるやうになつたが、この式のものとは早くからその例が知られてゐたとして、自分の資料ファイルの中から若干例を引いて寫眞、測量圖を示し（前引、七一—）、研究者としては失格ながらも、古美術の寫眞、拓本、測量圖の熱心な蒐集家としての面目だけは保つてゐる蒐集家と研究者とは別物であり、通常古美術蒐集家が自らを研究者と思ひこんだり、他人からさう認められたいすることはない。然るに古美術の寫眞や拓本や測量圖の蒐集家については往往さういふことが起るといふのは、一體どういふことであらうか。

- (5) 林一九五三、一八八—九、二二—
- (6) カールグレンは (Karlgren 1951, p. 7, fig. 13) その變異を分類、圖示してゐる。
- (7) 韓等一九五四
- (8) 山東省博物館一九六三、三六三
- (9) 山東省文物管理處一九六〇、一四
- (10) 衛聚賢が（衛一九三七）文字と考へて考察を試みてゐるのは全くの思ひ過しである。
- (11) 石龍過江水庫指揮部文物工作隊一九五六、一六一—七
- (12) Loehr 1963 によつて、殷青銅器の様式分類として必ずしも十分なものでないが、大體のことを指し示すのに便利であるからこの分類を

用ゐることとする。

- (13) 他にも例へば Honolulu Academy of Art, Reg. no. 2006. 1 の扁足鼎の頸の紋様もこれに近いものである。
- (14) 圖一、3、4 と近い紋様は例へば梅原一九三三、三、2 の尊の肩にもみられる。
- (15) 圖二、5 と同様な表現は、他にも例へば Karlgren 1952, pl. 5 の鼎の頸にも見出される。
- (16) White 1956, pl. 37, 3, pl. 74 に表はされたものも同様な小さな手をつけてゐる。その前に垂直に表はされてゐる目のない龍形もこの喉から遊離した羽根の變形とみられよう。
- (17) このやうな表現は學術發掘品では武官村大墓陪葬人 E 14 出土の鼎（郭一九五一、圖版一八、1）の頸にもあるが、圖版があまりよくないので圖としては示さなかつた。
- (18) 陳一九五四、圖版一、二及三頁。
- (19) 李一九五七、八六一
- (20) 梁、高一九六二、下、圖版二四—四
- (21) Loehr 1953, p. 47
- (22) 梁、高一九六二、圖版一九—二三〇
- (23) 樋口一九六七、一〇八。夔鳳は諸橋漢和大辭典には「一足の鳳」と釋し、金案の用例を引用してゐる。これを誰が何時から今問題の紋様の名としたかは知らない。兎も角先秦時代には出て來ない名稱である。
- (24) 殷時代の鳳凰がどのやうなものかは林一九六六參照。
- (25) 林一九五二、同一九五三、同一九六六a 他。
- (26) 劉一九三五、七、一二には彝とし、羅一九三六、一四、二六は觚とする。
- (27) 林一九六八、二三—三四
- (28) 同、一〇—一二
- (29) 石一九六二、三三〇
- (30) 林一九六六a、一五—九

- (31) Brinker 1967, p. 42
- (32) 中國科學院考古研究所一九六五、一七一—九
- (33) 同右、一七七參照。
- (34) これと同類の表現は、安陽小屯二三三號墓出土の甗 (Li 1967, pl. 36) の腹にも見出される。
- (35) 他に Karlgren 1943, pl. II. 1
- (36) 于一九三五、上、二四、梅原一九三三、二三
- (37) 于一九四〇、上、二八
- (38) 鳳凰の種類については林一九六六a參照。
- (39) 中國科學院考古研究所一九五九、圖版四七
- (40) 他にも同様な紋様をもつた出土地不明の爵が公私コレクション中に多數ある。一々引かない。
- (41) 林一九六二、一七〇
- (42) さきに筆者はこの形式の器を、自銘の例によつて罇と命名した (林一九六四a、二五七—八)。その後、この罇と命名した形式の器で罇と自名する器の存在が發表された (王一九六三)。罇字が罇であることは強運開が記すごとくである (強一九三五、五、一〇)。器種名を示す字として「罇」を用ゐることを止め、罇で統一することにした。
- (43) 例へば濱田一九一九、一、二七の方彝。
- (44) 容一九四一、上、一二五—六及圖一六六
- (45) 林一九五三、一八八—九〇
- (46) 同右、一八六
- (47) 上海博物館一九六四、四一
- (48) 天津市文化局文物組一九六四、圖二
- (49) 梁、高一九六二、圖版一九八、4
- (50) 同様な例は他に于一九三五、上、二九の盃 Kelley and Chen 1946, pl. XXXVI の壺など。
- (51) プリンカーは殷の白陶の紋様の様式を六式に分けた (Brinker 1968)。

殷中期に由來する鬼神

- プリンカーは抽象的な様式を頼りに關係資料を分類し、その様式の順序に相對的な年代の前後を割り振つたため、その様式分類及びその年代は發掘の結果知られてゐる遺物の年代と著るしい齟齬を示す。例へばプリンカー論文で第一式とされ、殷王朝の安陽遷都 (前二三〇〇年頃) より遙かに古い時代のものと考へられてゐる挿圖一六の白陶は、侯家莊第一〇〇二號大墓出土のもので (梁、高、一九六五、圖版七七) あるが、この墓はプリンカー氏も引用する李一九五七の論文八六一頁にもいはれる通り、侯家莊大墓群の中でも一〇〇一號一〇〇四號大墓よりおそいものである。白陶は堅いとはいへ陶器であるから、青銅器のやうな長年月にわたる傳世は考へ難いとすれば、この白陶は殷の安陽遷都後かなり経た時代のものであることは疑ひない。プリンカーの發掘による證據を一切無視した様式研究には方法上に重大な缺陷があり、その編年の試みも引用に値ひしないこと、かくの如くである。
- (52) 梅原一九三六、圖一七
- (53) 唐一九三四、四一—三
- (54) 李一九六五、五、一八七
- (55) 乙二三三五、二三七四、師友二、四 (以下甲骨文の用例の注には出典に甲骨學者が通常使用する略稱を用ゐるが、略稱と原の書名の對照表は略する)
- (56) 乙二二八五、五一六二、佚六一八、坊間一、四七、掇二、六八
- (57) 佚二〇〇〇、林一、一八、一〇、乙九七二 (女扁がある)、二五一〇、二五一一、七、七二二、清暉二二
- (58) 乙三三三四、七六七三、外四四二
- (59) 前二、二一、三
- (60) 福永一九六六、一〇六
- (61) 聞一九五六、四三
- (62) 第九節四一頁
- (63) なほ他に「良」の附く鬼神で顯著なものに彊良があるが、これは

確かにこれに當ると思はれる圖像が別にある(Hayashi 1970)。また  
蝮良といふものがあり、草澤の神といはれる。『文選』東京賦「斬  
蝮蛇蝮良」の注に「蝮良、草澤之神也」といふものである。この方  
はその形の特徴が全くわからない。

- (64) 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版二二  
(65) カールグレンは(Karlgrén 1961, p. 25) この段階の圖像の特色に  
よつてこの紋様を Square and crescents と呼んだのである。適切  
な命名とはいひ難い。カールグレンはまたこれを龍頭の大膽な省略  
形とみたのは粗雑な觀察によるものである。

- (66) Karlgrén 1968, p. 192

- (67) 郭中片羽三集、上、二に掲げられた殷—西周前期の鉦の柄には、圖  
一一、六のやうな圖像の下に、け、ばが二對出た動物の尾のごときも  
のを加へた形の圖象記號がつけられてゐる。これが眞物とすると、  
圖一一、八に掲げたやうな鬼神の古い形と見ることが出来るわけ  
であるが、その眞偽については頗る疑はしい。この銘はこの圖象記號  
の尾を下にした方向に見るやうに書かれてゐるのであるが、さう見  
るためには鉦の口を下に向けなければならぬ。ところで鉦といふ  
ものは口を上に向けて使ふもので、鉦の饗饗紋は鉦をその向きに持  
つと正立するやうに表はされてをり、銘文も同様である。今問題の  
銘文もさうすると眞偽が怪しくなる。さう思つて仔細にみると、確  
かに生彩を缺き、後刻の疑ひが濃い。故にここでは資料として採用  
しなかつた。

- (68) 容一九五九、五、二四  
(69) 中國科學院考古研究所一九六五、一一、八  
(70) 羅一九三六、卷六目錄  
(71) 容一九三四、七二  
(72) 容一九五九、五、二四  
(73) 林一九六八、五九  
(74) 同右、一〇一二

- (75) 梁、高一九六七、圖版三、二四、1  
(76) この鼎の蓋の中心部にもこれと同式の紋様があり、また他の器(梅  
原一九三六、圖版四五、敦の器側)にも例がある。  
(77) 『說文』に「亡、逃也、从入」<sup>レ</sup>といふのは、その本義も、字形の  
説明も間違つてゐる。

- (78) 甲骨文の申字の説明として葉玉森は、『說文』に虹の籀文として虫  
と申に从ふ𧈧字を引き、「申、電也」と説明してゐるのにより、「象  
電耀屈折」といふ。李孝定もこれに賛成してゐるが(李一九六五、  
一四、四三八五—九〇)、字形の説明としては見當外れといふ他な  
い。即ち、申の字の音で電、即ち雷の電光を表はす語を表現するこ  
とができたことは確かとしても、それを以て直ちに申の字が電光を  
象つたものであるとはいひ得ないからである。

- (79) 李一九六五、一四、四三八七  
(80) 林一九六六、八七—九  
(81) 例へば于一九三五、上、六の鼎  
(82) 林一九六八、五九  
(83) 例へば于一九三五、上、二四の尊  
(84) 中國科學院考古研究所一九六五、五、六—七  
(85) 郭沫若が(郭一九六五、考釋一一三)「于乃竿之初文、象形。二象  
竿管、」其吹也。其从弓作者、乃管外之匏。从于亦形聲而兼會意、  
取其用樂」といふが、郭氏獨特の思ひつきの説にすぎない。  
(86) 林一九五三、一八九  
(87) 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版二二  
(88) 林一九五三、一九六—八  
(89) 李一九六五、一一、三四五四—五  
(90) 郭一九六五、考釋一一三、李一九六五、一一、三四五五  
(91) 陳一九五六、五六—三  
(92) 陳一九五六、一五七—九。卜辭中では、帝はそもそも一つの神格  
として祭祀を受けたことを示す資料がないといはれる(伊藤一九六

七、三四)。戰國時代においても、實際に盛んに祭祀が行はれたのは上帝、皇天などでなく、「百神」即ち自然界の神、鬼魅であつたといはれてゐる(文崇一 一九六七、一四二)。

(94) 陳一九五六、三六

(95) 同右、五六三

(96) 乙、三二二、「貞翌甲戌河其令雨、貞翌甲戌河不令雨」と。

(97) 伊藤一九六七、三五—八

(98) 林一九六八、一〇—一二

(99) 同右、五六—七

(100) 同右、八六。なほ所謂析子孫形圖象記號について筆者はさきに「子」とそれ以外の二要素とから成ると見る解釋を記したが(林一九六八、八五)、この考へは撤回する。

貝塚一九三八、五八

(101) 陳一九五四、二二三、圖版一、二

(102) 同右、二三

(103) 盤の例、Watson 1962, pl. 26 a (偽か)。Pope, Gettens, Cahill, Barnard 1967, pl. 3, 容一九四一、上、圖一〇七、黃一九三七、上、三

四—五、于一九五七、四八五(偽か)

戈の例、黃一九三五、下、一、黃一九三七、下、九、梁一九四

四、下、四。第一、第二の例は銘文が鳥の目をつぶしてゐる點からみて、この銘文がこの鳥の名とは到底考へ難い。

鉞の例、梁一九四四、下、一

(105) 珠九三五

(106) 郭一九三三、考釋八二

(107) 1、海外東經、「玄股之國在其北、其爲人衣魚、食鰓、使兩鳥來之

(懿行案、高誘注淮南墜形訓、引此經無使字、兩鳥來之上、有其股黑三字)」

2、大荒東經、「有爲國黍食、使四鳥虎豹熊羆」

3、同右、「大荒之中有山、名曰合虛、日月所出、有中容之國、帝

殷中期に由來する鬼神

俊生中容、中容人食獸不實、使四鳥豹虎熊羆」

4、同右、「有司幽之國、帝俊生晏龍、晏龍生司幽、司幽生思士不妻、思士不夫、食黍食獸、是使四鳥」

5、同右、「有白民之國、帝俊生帝鴻、帝鴻生白民、白民銷姓、黍食使四鳥虎豹熊羆」

6、同右、「有黑齒之國、帝俊生黑齒、姜姓、黍食使四鳥」

7、同右、「有招搖山、融水出焉、有國曰玄股、黍食使四鳥」

8、大荒南經、「大荒之中有不庭之山、榮水窮焉、有人三身、帝俊妻娥皇、生此三身之國、姚姓、黍食使四鳥」

9、同右、「有人名曰張弘、在海上捕魚、海中有張弘之國、食魚使四鳥」

10、大荒西經、「西北海之外、赤水之西有先民之國、食穀使四鳥」

11、大荒北經、「有叔歌之國、顓頊之子、黍食使四鳥虎豹熊羆」

12、同右、「有毛民之國、依姓、黍食使四鳥、禹生均國、均國生役采、役采生修齡、修齡殺綽人、帝念之、潛爲之國、是此毛民

例へば梅原一九三三、圖版一〇、一一

(108) 注(107)、1及び7參照。

神像を兩鳳が來む例は他にもある。例へば郭一九五九、圖版九三、上から二段目、梅原一九三六、圖版四八等

(111) 林一九六三、一一—一

瞳子が横長の線で表はされた目が牛科の動物の目であることはコン

ステンが指摘してゐる(Consten 1959, p. 288)

中國科學院考古研究所一九六三、一八一—五

石一九六二、三二六、圖七

(116) 同右、三二六

(117) 林一九六〇、四七一—八

(118) 伊藤一九六七、四七



引用文獻目錄

日本文、中國文（著者名五〇音順）

- 伊藤道治 一九六七、古代殷王朝のなぞ、東京  
 于省吾 一九三五、雙劍詒吉金圖錄、北京  
 “ “ 一九四〇、雙劍詒古器物圖錄、北京  
 “ “ 一九五七、商周金文錄遺、北京  
 梅原末治 一九三三、歐米菟儲支那古銅精華、京都  
 “ “ 一九三三、a、杞禁の考古學的考察、京都  
 “ “ 一九三四、白鶴吉金集、神戸  
 “ “ 一九三六、戰國式銅器の研究、京都  
 “ “ 一九三七、洛陽金村古墓聚英、京都  
 “ “ 一九四〇、河南安陽遺寶、京都  
 “ “ 一九四一、白鶴吉金撰集、神戸  
 “ “ 一九五九、日本菟儲支那古銅精華、京都  
 “ “ 一九六一、殷中期とされている鄭州出土古銅器の性質、史學、  
 三三、二、一一二四。  
 “ “ 一九六一、a、泉屋清賞新收編、京都  
 榮厚 一九四七、冠寧樓吉金圖、京都  
 衛聚賢 一九三七、中國最古の文字已發現、何一九三七、一一一六所收  
 王獻唐 一九六三、邵伯壘考、考古學報、一九六三、二、五九一六四  
 何天行 一九三七、杭州良渚鎮之石器與黑陶、上海  
 河南省文化局文物工作隊 一九五九、鄭州二里岡、北京  
 河南文物工作隊第一隊 一九五五、鄭州市白家莊商代墓葬發掘簡報、文物  
 參考資料、一九五五、一〇、二四一四二  
 貝塚茂樹 一九三八、殷代金文に見えた圖象文字について、東方學報、  
 京都九、五七一一一  
 貝塚茂樹、伊藤道治 一九五三、甲骨文斷代研究法の再検討——董氏の文  
 武丁時代卜辭を中心として——東方學報、京都三三、一一七  
 八  
 郭德維、陳賢一 一九六四、湖北黃坡盤龍城商代遺址和墓葬、考古、一  
 九六四、八、四二〇一一  
 郭寶鈞 一九五一、一九五〇年春殷墟發掘報告、中國考古學報、五、一  
 “ “ 一九五九、山彪鎮與琉璃閣、北京  
 “ “ 一九三三、卜辭通纂、東京  
 郭沫若 一九六五、殷契粹編、北京  
 “ “ 一九六五、安徽嘉山泊崗引河出土的四件商代銅器、文物、一九  
 六五、七、二三一六  
 葛治功 一九五四、河南登封縣玉村古文化遺址概況、文物參考資料、一  
 九五四、六、一八一二四  
 韓維周等 一九三五、說文古籀三補、上海  
 強運開 一九三六、尊古齋所見吉金圖、北京  
 黃濬 一九三五、鄆中片羽、初集、北京  
 “ “ 一九三七、鄆中片羽、二集、北京  
 “ “ 一九四二、鄆中片羽、三集、北京  
 江西省文物管理委員會 一九六五、江西南昌老福山西漢木槨墓、考古、一  
 九六五、六、二六八—七二、三〇〇  
 侯馬市考古發掘委員會 一九六二、侯馬牛村古城南東周遺址發掘簡報、考  
 古、一九六二、二、五五一六二  
 小杉一雄 一九五四、雷紋の性質と起原、美術史、三、三、一〇八一—一  
 九頁  
 山東省文物管理處 一九六〇、山東日照兩城鎮遺址勘察紀要、考古、一九  
 六〇、九、一〇一四  
 山東省博物館 一九六三、山東曲阜新石器時代遺址調查、考古、一九六三、  
 七、三六二—八  
 上海市文物保管委員會 一九六二、上海市青浦縣崧澤遺址的試掘、考古學  
 報、一九六二、二、一一二八  
 上海博物館 一九六四、上海博物館藏青銅器、上海

- 青山莊清賞、古銅器篇、一九四二、東京
- 西北歷史博物館 一九五三、古代裝飾花紋選集、西安
- 石 興邦 一九六二、有關馬家窯文化的一些問題、考古、一九六二、六、三一八—二九
- 石 璋如 一九五九、小屯、第一本、遺址的發現與發掘、乙編、建築遺存、南港
- 〃 〃 一九六一、小屯殷代丙組基址及其有關係的現象、慶祝董作賓先生六十五歲論文集、下（歷史語言研究所集刊、外編第四種）、七一八—一八〇二
- 石龍過江水庫指揮部文物工作隊 一九五六、湖北梁山、天門考古發掘簡報、考古通訊、一九五六、三、一一—二一
- 陝西省博物館、陝西省文物管理委員會 一九六三、扶風齊家村青銅器群、北京
- 陝西省博物館 一九六五、陝西省博物館新近徵集的幾件西周銅器、文物、一九五七、七、一七一—二一
- 〃 〃 一九六五a、秦漢瓦當、北京
- 陝西省文物管理委員會 一九五七、長安普渡村西周墓的發掘、考古學報、一九五七、一、七五—八五
- 〃 〃 一九六四、陝西省永壽縣、武功縣出土西周銅器、文物、一九六四、七、二〇—一五
- 曾昭燁等 一九五六、沂南古畫像石墓發掘報告、北京
- 孫 海波 一九三七、新鄭彝器、北京
- 〃 〃 一九三八、濬縣彝器、北京
- 中國科學院考古研究所 一九五六、輝縣發掘報告、北京
- 〃 〃 一九五九、上村嶺虢國墓地、北京
- 〃 〃 一九六三、西安半坡、北京
- 〃 〃 一九六五、甲骨文編、北京
- 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊 一九六五、河南濬縣二里頭遺址發掘簡報、考古、一九六五、五、二一五—二二四

殷中期に由來する鬼神

- 陳 夢家 一九五四、殷代銅器、考古學報、七、一五一—五九
- 〃 〃 一九五六、殷虛卜辭綜述、北京
- 天津市文化局文物組 一九六四、天津市新收的商周青銅器、文物、一九六四、九、三三一—六
- 唐 蘭 一九三四、殷虛文字記
- 熱河省博物館籌備組 一九五五、熱河凌源縣海島營子村發現的古代青銅器、文物參考資料、一九五五、八、一六—二七
- 馬得志、周永珍、張雲鵬 一九五五、一九五三年安陽大司空村發掘報告、考古學報、九、二五—九〇
- 濱田耕作 一九一九、泉屋清賞、京都
- 林 巳奈夫 一九五二、龍について、史林、三五、三、五一—六九
- 〃 〃 一九五三、殷周青銅器に現れる龍について、附論——殷周銅器における動物表現形式二三について——、東方學報、京都三三、一八一—二二八
- 〃 〃 一九五八、殷周都市國家（殷周の遺蹟）世界考古學大系、六、一五一—三一
- 〃 〃 一九六〇、殷周時代の遺物に表わされた鬼神、考古學雜誌、四六、二、一〇五—一三三
- 〃 〃 一九六二、殷周青銅器の紋様、世界美術全集（角川書店版）一二、中國(1)、殷・周・戰國、一六五—一七二
- 〃 〃 一九六三、殷周時代の幾何學的な紋様一、二について、東方學、二六、一一—一六
- 〃 〃 一九六四、帝舜考、甲骨學、一〇、一六一—三〇
- 〃 〃 一九六四a、殷周青銅彝器の名稱と用途、東方學報、京都三四、一九九—二九七
- 〃 〃 一九六六、中國先秦時代の旗、史林、四九、二、六六—九四
- 〃 〃 一九六六a、鳳凰の圖像の系譜、考古學雜誌、五二、一、一一—一二九
- 〃 〃 一九六八、殷周時代の圖像記號、東方學報、京都三九、一一—

- 一七  
樋口隆康 一九六七、中國の銅器、東京  
傳 永魁 一九五九、洛陽東郊西周墓發掘簡報、考古、一九五九、四、一  
八七一八  
福永光司 一九六六、莊子、內篇、大阪  
聞 一多 一九五六、周易義證類纂、古典新義、上、五一—六五  
文 崇一 一九六七、楚文化研究、南港  
三上次男他 一九六九、東洋美術、六、工藝、東京  
水野清一 一九五九、殷周青銅器と玉、東京  
容 庚 一九三四、武英殿彝器圖錄、北京  
〃 〃 一九三五、十二家吉金圖錄、南京  
〃 〃 一九三六、善齋彝器圖錄、北京  
〃 〃 一九三八、頤齋吉金續錄、北京  
〃 〃 一九四一、商周彝器通考、北京  
〃 〃 一九五九、金文編  
米澤嘉圖 一九六三、中國美術Ⅰ、講談社版世界美術大系、八、東京  
羅 振玉 一九三六、三代吉金文存  
李 孝定 一九六五、甲骨文字集釋、臺北  
李 濟 一九五七、殷虛白陶發展之程序、歷史語言研究所集刊、二八下、  
八五五—八二
- 李 濟、萬 家保 一九六四、殷虛出土青銅觚形器之研究、南港  
〃 〃 〃 一九六六、殷虛出土青銅爵形器之研究、南港  
劉 體智 一九三五、小校經閣金文拓本  
梁 思永、高 去尋 一九六二、侯家莊、第二本、一〇〇—一號大墓、臺北  
〃 〃 〃 一九六五、侯家莊、第三本、一〇〇—二號大墓、臺北  
〃 〃 〃 一九六七、侯家莊、第四本、一〇〇—三號大墓、臺北  
梁 上椿 一九四四、巖窟吉金圖錄、北京

歐文 (著者名アルフマン・順)

- d'Argencé, René-Yvon Lefebvre, 1966, *Ancient Chinese Bronzes in the Avery Brundage Collection*, Berkeley  
Brinker, H., 1967-8, *The Décor Style of Shang White Pottery*, *Archives of Asian art*, vol. XXI, pp. 39-62  
Consten, Eleanor von Erdberg, 1957-9, *A Terminology of Chinese Bronze Decoration*, *Monumenta Serica*, vol. XVI, pp. 287-314; vol. XVII, pp. 208-254; vol. XVIII, pp. 245-293  
Hayashi, M., 1970, *The Character of the Twelve Gods in the Ch'u Silk Manuscript and their Antecedents*, *Proceedings of the Symposium of the Ch'u Silk Manuscript*, Aug. 21st to 25th, New York, New York  
Heusden, W. Van, 1952, *Ancient Chinese Bronze of the Shang and Chou Dynasties, an Illustrated Catalogue of the Van Heusden Collection with a historical Introduction*, Tokyo  
Karlgren, B., 1948, *Bronzes in the Hellström Collection*, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 20, pp. 1-38  
〃 〃 1949, *Some Bronzes in the Museum of Far Eastern Antiquities*, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 21, pp. 1-25  
〃 〃 1951, *Note on the Grammar of Early Chinese Bronze Décor*, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 23, pp. 1-80  
〃 〃 1952, *A Catalogue of the Chinese Bronzes in the Alfred F. Pillsbury Collection*, London  
〃 〃 1958, *Bronzes in the Wesselon Collection*, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 30, pp. 177-196  
Kelley, Ch. F. and Chen Meng-chia, 1946, *Chinese Bronzes from the Buckingham Collection*, Chicago

- Kidder, J. E. Jr., 1956, *Early Chinese Bronze in the City Art Museum of St. Louis*, St. Louis
- Li Chi, 1957, *The Beginnings of Chinese Civilization*, Seattle
- Lodge, J. E., Wenley, A. G. and Pope, J. A., 1946, *A Descriptive and Illustrated Catalogue of Chinese Bronzes, acquired during the administration of John Ellerton Lodge*, Washington
- Loehn, M., 1953, *The Bronze Style of the Anyang Period*, *Archives of the Chinese Art Society of America*, vol. VII, pp. 42-53
- Loo, C. T., 1950, *An Exhibition of Chinese Archaic Jades*, New York
- Palmgren, N., 1948, *Selected Chinese Antiquities from the Collection of Gustaf Adolf, Crown Prince of Sweden*, Stockholm
- Pope, J. A., Gettens, R. J., Cahill, J. and Barnard, N., 1967, *The Freer Chinese Bronzes, vol. I*, Washington
- Visser, H. F. E., 1947, *Asiatic Art in Private Collection of Holland and Belgium*, Amsterdam
- Watson, W., 1962 *Ancient Chinese Bronzes*, London
- Weber, Ch. D., 1968, *Chinese Pictorial Bronze Vessels of the Late Chou Period*, Ascona
- White, W. C., 1956, *Bronze Culture of Ancient China*, Toronto

# 挿図出所目録

- 圖一、1、2 筆者作圖
- 3 中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六五、圖版三、10
- 4 韓等一九五四、圖一
- 5 山東省博物館一九六三、圖四、1 (縮尺約 $\frac{1}{4}$ )
- 6、8、9 筆者、北京歷史博物館攝影寫真による (山東省文物管理處一九六〇、圖四、同2、同3)
- 7 筆者、上海博物館攝影寫真による
- 10 何一九三七、卷首圖版

- 圖二、11 米澤一九六三、四五頁圖三六
- 1 李、萬一九六四、下、挿圖二一
- 2 樋口隆康氏攝影寫真による (濱田一九一九、二、五六)
- 3 中國科學院考古研究所一九五六、圖三七、九
- 4 李、萬一九六四、下、挿圖二三
- 5 京大人文科學研究所考古資料二二〇四七 (梅原一九五九、六一、三〇一)
- 6 樋口隆康氏攝影寫真による (濱田一九一九、二、五三)
- 7 樋口隆康氏攝影寫真による (梅原一九五九、六一、二二九)
- 8 容一九三四、一四三
- 9 梁、高一九六二、圖版二四四、2
- 10 梅原一九三四、二〇
- 11 黃一九四二、上、八
- 12 樋口隆康氏攝影寫真による (濱田一九一九、一、二八)
- 13 京大人文科學研究所考古資料一一八〇一
- 14 梅原一九三三、四四
- 15 Loo 1950, pl. 50, 8
- 16 Karlgren 1949, pl. 24, 1
- 17 曾等一九五六、圖版六一、拓片五〇幅 (縮尺約 $\frac{1}{2}$ )
- 18 同右、圖版六八、拓片五七幅 (縮尺約 $\frac{1}{2}$ )
- 19 劉一九三五、七、一二
- 20 陝西省博物館一九六五a、圖版一一 (縮尺約 $\frac{1}{2}$ )
- 21 石一九六二、圖二、3
- 22 上海市文物保管委員會一九六二、圖六、三八、圖二二、6、圖版六、11
- 圖三、1 黃一九三七、上、六
- 2 樋口隆康氏攝影寫真による (濱田一九一九、四〇)
- 3 黃一九四二、上、二九
- 4 梅原一九三三、一一二

- 5 熱河省博物館籌備組一九五五、圖版一四
- 6 京大人文科學研究所考古資料一三〇五
- 7 侯馬市考古發掘委員會一九六二、圖版二、3
- 8 佚五二四
- 9 乙八八七二
- 10 鐵九二、三

圖四、

- 1 葛一九六五、圖九、3
- 2 Heusden 1962, pl. 1
- 3 Karlgren 1952, pl. 15
- 4 Palmgren 1948, pl. 2
- 5 樋口隆康氏撮影の寫眞による（ホノルル美術館登錄番號三八一〇の壺）

圖五、

- 6 樋口隆康氏撮影寫眞による（梅原一九六一 a、五）
- 7 Pope, Gettens, Cahill and Barnard 1967, pl. 15
- 8 筆者の上海博物館撮影の寫眞による
- 9 孫一九三七、一〇三
- 10 梅原一九三六、圖版一一三
- 1 李、萬一九六六、挿圖二二、22
- 2 Kidder 1956, pl. 4
- 3 青山莊清賞、古銅器篇、二三（縮尺約 $\frac{1}{4}$ ）
- 4 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、二、五七）
- 5 梅原一九三七、圖版七五、1
- 6 郭一九五九、圖版一二二、3
- 7 梅原一九三七、圖版八九、3
- 1、2 榮一九四七、三五
- 3 梁一九四四、上、八
- 4 梁、高一九六二、圖版二〇九、1
- 5 サックラー氏提供拓本による（サックラー氏蒐集壺）
- 6 Lodge, Wenley and Pope 1946, pl. 4

圖七、

- 7 梅原一九五九一六二、二二
- 8 葛一九六五、圖一〇
- 9 同右、圖九、2
- 10 梅原一九三三、一〇二
- 11 梅原一九四一、一
- 12 容一九三五、契一八
- 13 黃一九四二、上、二二
- 14 水野一九五九、一七〇
- 15 同右、一七一
- 16 孫一九三八、圖版五八、2
- 17 濱田一九一九、六二
- 18 筆者撮影
- 1 アトキンス博物館寫眞による（同博物館五五—五二の壺）
- 2 陝西省博物館一九六五、圖版四、1
- 3 陝西省博物館、陝西省文物管理委員會一九六三、二六
- 4 中國科學院考古研究所一九五九、圖九、4（圖版四一、1）
- 1 河南省文物工作隊第一隊一九五五、圖版一一
- 2 Karlgren 1949, pl. 7, 1
- 3 上海博物館一九六四、一一
- 4 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、續、一七六）
- 5 江西省文物管理委員會一九六五、圖六
- 6 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、一、四〇）
- 7 李、萬一九六四、下、挿圖一八
- 8 西北歷史博物館一九五三、七
- 1 郭、陳一九六四、圖二
- 2 葛一九六五、圖九、一
- 3 梅原一九三三、一二五
- 4 黃一九四二、上、二二
- 5 三上他一九六九、一一

圖九、

- 6 d'Argencé 1966, pl. 13
- 7 馬等一九五五、圖一九
- 8 梅原一九三三、四七
- 9 梅原一九五九一六二、一三三
- 10 陝西省文物管理委員會一九五七、圖六、3
- 11 陝西省文物管理委員會一九六四、圖二
- 12 梅原一九五九一六二、三八六
- 13 黃一九四二、上、13
- 14 西北歷史博物館一九五三、三
- 15 Visser 1947, pl. 49, no. 79
- 16 Pope, Gettens, Cahill and Bernard 1967, pl. 5
- 17 White 1956, pl. 30, A
- 18 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、一、三）
- 19 朝日新聞社撮影寫眞による（濱田一九一九、二、五二）
- 20 容一九三四、一四五
- 1 河南省文物工作隊一九五五、圖版一三
- 2 容一九三四、一四一
- 3 サックラー氏提供拓本による（サックラー氏蒐集壺）
- 4 黃一九四二、下、二六
- 5 梁、高一九六二、圖版二〇八、3
- 6 梅原一九四〇、圖版七五、4
- 7 梁、高一九六二、圖版二〇八、6
- 8 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、續、一八一）
- 9 京都大學人文科學研究所考古資料二三〇一七による（出光美術館藏蓋）
- 10 梅原一九四一、三〇
- 11、12 容一九三四、九九
- 13 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、一、一〇）
- 14 孫一九三七、六九

殷中期に由來する鬼神

- 15 容一九三五、退、四
- 16 侯馬市考古發掘委員會一九六二、圖四、5
- 17 乙二五一〇
- 18 乙二三三四
- 19 佚六一八
- 20 乙二二八五
- 21 羅一九三六、一四、一一、一
- 22 說文解字、五、下、一九三部
- 23 甲二六九五
- 24 鐵一八五、一
- 25 梁、高一九六二、圖版二一六、3
- 26 Karlgren 1962, pl. 32
- 27 郭一九五一、圖版三五
- 28 孫一九三八、一五
- 29 京大人文科學研究所考古資料一三〇八〇による
- 1 河南省文化局文物工作隊一九五九、圖三一、9
- 2 梅原一九三三、一〇一
- 3 梁、高一九六二、圖版二一〇、6
- 4 梅原一九五九一六二、一三七
- 5 容一九三六、五八
- 6 傅一九五九、圖版四、5
- 7 容一九三五、尊、一四
- 8 Karlgren 1962, pl. 33
- 9 羅一九三六、六、一三、八
- 10 林、一、三、四
- 11 羅一九三六、九、一三、一
- 12 說文解字、五、下、一七七部
- 1 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版一四
- 2 梁、高一九六七、插圖二二

六九

- 3 孫一九三八、一五  
4 梅原一九五九一六二、九一  
5 梅原一九三三、一三九  
6 陝西省文物管理委員會一九六四、圖三（縮尺約1/10）  
7 ド・ヤング記念博物館寫眞による（同博物館B六〇B九三一の蠶）  
8 容一九三八、四五乙  
9 10 郭一九五九、圖版三九、2、5  
11 鐵一六三、四  
12 福三五  
13 乙九七一  
14 甲骨文中字の半分  
1 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、二、五六）  
2 容一九三四、一四五  
3 黃一九三六、一、四二  
4 京大人文科學研究所考古資料一二八四四による（ド・ヤング記念博物館藏登錄番號B六〇B四十の鼎）  
5 樋口隆康氏撮影寫眞による（濱田一九一九、一、一二）  
6 羅一九三六、一六、二五、七

- 7 前八、一四、二  
8 前八、四、七  
9 羅一九三六、一九、一三、一  
10、11、12 2、3の構成要素  
1、2 中國科學院考古研究所一九五六、圖三七、4、5  
3 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版九  
4 同右、圖版五  
1 同右、圖版一四  
2 同右、圖版七  
3 中國科學院考古研究所一九五六、圖三七、二  
4 8よりの書起し  
5 9よりの書起し  
6 4、5の合成  
7 黃一九四二、上、三八  
8、9 サックラー氏提供拓本（サックラー氏蒐集鼎）  
圖一六、  
1 河南文物工作隊第一隊一九五五、圖版八  
2 梅原一九三三、一二六  
3 容一九三五、居、九  
4 容一九三五、雪、一一

圖一三、

圖一六、